

令和3年度

奈良教育大学 ESD 学生活動報告書



2022年3月

近畿 ESD コンソーシアム
国立大学法人 奈良教育大学

はじめに



2021年度はコロナで始まりコロナで暮れた1年間でした。大学の授業も前期はオンラインで実施、コロナの拡大の第5波が収束に向かった後期は、12月までは対面式で授業ができましたが、感染力の強いオミクロン株の登場により、1月からオンライン授業になるという、コロナに振り回された感があります。本活動報告書には、そのような中でも工夫して「ESD実践」という活動を続けた報告、またオンライン、対面に関わらず、授業以外のESDに関する公開講座や実践交流会に能動的に参加して学んだ「ESD演習」

の報告が掲載されています。コロナの感染を防ぐことは重要ですが、学生時代も学生のみなさんの人生において貴重な時間帯ですので、何もしないまま終わってしまったのは悔いが残るでしょう。感受性の強い学生時代に、多くの人に出会って行動を共にし、さまざまな経験を積むことは、みなさんの人生に大きな影響を与えることとなります。そこで出会った人達が生涯の友人になることもしばしばあります。

みなさんの多くは学校の教員になられる方々でしょう。ESDの理念を基盤とした教育実践を行うことが学習指導要領に明示されたことから、学生時代にESDを学び、支援活動などを体験することは、教育活動を実践していく上で大きな財産になることは間違いありません。奈良教育大学では学生のみなさんを対象としたESDティーチャープログラムも用意されています。ぜひ、卒業までにESDティーチャープログラムに参加して、ESDティーチャーの認定証を取得していただきたいと思います。

奈良教育大学は2022年度から奈良女子大学と法人統合します。これを機に、キャンパス内に「ESD・SDGsセンター」を設置し、ますますESDの研究と教育に取り組んでいきます。この取組に多くの学生のみなさんが能動的に参加し、その成果を取得されることを期待しています。

2022年3月31日

奈良教育大学 副学長 高橋 豪仁

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪ 目 次 ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

はじめに	・・・・・・・・ 1
目次	・・・・・・・・ 2
第4回「集まれ！ESD 子ども広場」実施報告書	・・・・・・・・ 3
野外活動支援報告書	・・・・・・・・ 6
添上高等学校人文探究コース連携事業報告書	・・・・・・・・ 8
近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・ESD 子どもフォーラム報告書	・・・・・・・・ 10

参加学生の振り返り(ポートフォリオ)

おわりに	・・・・・・・・ 59
------	-------------

近畿 ESD コンソーシアム 第4回「集まれ！ESD 子ども広場」実施報告書

音楽教育専修3回生 佐藤 ころろ

1. これまでの経緯と目的

奈良教育大学では、『地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』の一環として、平成29年度まで「ESD 子どもキャンプ」を6回実施してきた。これは、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生を対象とした、ESD を体験的に学ぶ一泊二日の宿泊活動である。平成30年度からは、近畿 ESD コンソーシアム事業として、日帰りでESD を体験的に学ぶ「集まれ！ESD 子ども広場」を実施している。

本事業の目的は次の二つある。

- (1) ESD (持続可能な開発のための教育) を楽しく体験的に学び合う。
- (2) 子どもと関わる活動を通して、教員を目指す上で必要な資質・能力を身につける。

2. 概要

1で述べたように、本来は大学に子どもたちを集めて行っている。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延防止の観点から、子どもたちを大学に集めるのを断念した。そこで、大学生がユネスコスクールである奈良市立伏見小学校の5年生の4クラスに日程を分けて訪れ、2単位時間を使って出前授業を行った。

3. 開催日
- 令和3年12月2日(木) 5・6校時…5年2組
 - 令和3年12月6日(月) 5・6校時…5年3組
 - 令和3年12月7日(火) 5・6校時…5年4組
 - 令和3年12月9日(木) 5・6校時…5年1組

4. 開催場所 奈良市立伏見小学校5年生の各教室

5. 参加者
- 奈良市立伏見小学校の5年生4クラス
 - 大学生 25名
 - 教職員 1名

6. テーマ 「見える世界、広がる視点」

このテーマは2つのことを狙っている。1つ目は児童に見えるものの違いや人の見方・考え方といった視点の違いを感じさせることであり、2つ目は自分の見方や考え方が唯一ではないということを感じさせることだ。この目標を達成するために、以下の学習指導案に沿って授業を行った。

7. 学習指導案の一例

時間	学習活動	指導上の留意点
5	1. トリックアートを見て、それに興味を持つ。 (1) トリックアート①を見る。 (2) トリックアート②を見る。	<ul style="list-style-type: none"> ・トリックアート①を見せる。 ・トリックアートがどのように見えているかを聞く。 ・児童が感じたことを言いやすいような雰囲気づくりをする。 ・トリックアート②を見せる。 ・トリックアート①を見せた時と同じことに気を付ける。
35	2. 物事には様々な見方・考え方があることを実感する。 (1) トリックアートを工作し、考える。 ①薄クリーム画用紙に絵を描く。 ②薄クリーム画用紙に描かれている線に沿ってハサミで切る。 ③切った画用紙を白画用紙に貼る。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に準備したキットを配布する。 ・準備物が書かれた模造紙を黒板に貼る。 ・準備物が全て揃っているか全体で確認する。 ・実演しながら作り方を説明する。 ・何分までと作業時間を決める。
40	④完成した作品を見せ合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・見る角度を変えると見える絵が異なっていることに気づかせる。
45	⑤感想交流をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを配布する。 ・個人で感想をワークシートに記入したあと、グループや全体で交流させる。
55	(2) 風刺画と風刺画的な写真を見て、考える。 ①風刺画(アップ)を見る。 ②風刺画(全体)を見る。	<ul style="list-style-type: none"> ・風刺画(アップ)を見せてから、風刺画(全体)を見せる。 ・風刺画(アップ)と風刺画(全体)を見て、描かれている2人の立場が変わっていることに着目させる。 ・見る部分によって、捉え方が変わること気づかせる。
65	③写真①を見る。 ④写真②を見る。	<ul style="list-style-type: none"> ・写真①では、優先席で足を伸ばして座っている人に着目させる。 ・写真②では、写真①に写っていた人は足を骨折していたことに気づかせる。 ・見えているものが全てではないことを捉えさせる。 ・自分の見方・考え方が全てではなく、様々な見方・考え方があることを捉えさせる。
25	3. 学習をまとめ、学んだことを自分事化する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 残りの3ヶ月このクラスで仲良くするために頑張りたいことは何か？ </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・喧嘩をしたときや話し合いで意見がぶつかったときなど具体的な場面を示す。

8. 企画学生の役割分担

実行委員会

◎加藤 真由	佐藤 ころこ	根本 優	川田 大登
--------	--------	------	-------

※◎は本事業の代表

実施日ごとに分けられた活動班

本事業の実施日時が大学の講義と重なったため、授業実践に行けない学生も事業に関わるべく、それまでに授業展開を考えたり準備をしたりする役割と、それとともに当日実際に授業に行く役割をつくった。

	12月2日班	12月6日班	12月7日班	12月9日班
当日運営 と 準備	西條 秀哉	山本 健太	足立 繁郁	狗飼 菜々子
	井原 奈佑	佐藤 ころこ	南方 怜美	阪中 菜々子
	根本 優	大矢 真央	加藤 真由	木村 萌々香
	木村 直希	◎實久 峰希央	◎吉岩 尚樹	長滝谷 幸子
	◎北野 結衣			木下 結等
準備		岡本 真実	川口 恵里奈	川田大登
		前田 桃香	森 恵里奈	

(◎は各班のリーダー)



奈良市立飛鳥小学校 野外活動支援 報告書

教育学専修 3 回生 岩城雄大

1. 実施日 令和 3 年 11 月 11 日 (木)
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 教育学専修 3 回生 岩城雄大
社会科教育専修 2 回生 北野結衣
心理学専修 2 回生 木村直紀
奈良市立飛鳥小学校 第 5 学年児童、引率教員複数名

4. 概要

令和 3 年 11 月 11 日 (木)、奈良市青少年野外活動センターにおいて、奈良市立飛鳥小学校第 5 学年の野外活動が行われ、本学学生 3 名がその支援に当たった。例年は宿泊を伴う活動を行っているが、今年は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、日帰りの活動となった。木工クラフト、キャンドルファイヤーなどの支援を行った。支援の具体的な内容としては、館内オリエンテーリングのサポート、フォトフレームづくりの補助、昼食の際の注意点についての指導、キャンドルファイヤーでの点火の際の注意点などについての指導、歌の指導と学生主導のスタンプとゲームである。

5. 参加学生による振り返り

2 年ぶりの野外活動支援ということで、少々緊張感があったが、最終的には児童、学生、教員がともに楽しみ、友情が育まれた良い活動になったと考えている。突飛で危ない行動をする児童にも、手段の提案や声掛けをして危険を回避するように仕向けたり、話を聴くときは聴き、はじけるときは思い切りはじけるという緩急、メリハリもつけることができたりしていたと感じている。ユネスコクラブが代々歌い継いできた「火命民」も事前指導の時よりも盛り上がっていたので、嬉しかった。応援に駆けつけてくださった先生方のゲームも面白かった。私もアドリブに対応できるようにしていきたいと考えている。

(教育学専修 3 回生 岩城雄大)

コロナ禍ということもあり、ゲームの発案や流れづくりなどに苦戦したが、児童は元気いっぱい活動に積極的に参加してくれた。歌を歌う際には、大きな声を出し、全力で振りをしてくれる児童が多く、嬉しかった。当日は雨天で、キャンドルファイヤーに変更になるなど臨機応変に対応することが多かったが、先生方の助けも受けながら無事に終わることができた。反省点としては、児童の輪の中に学生が入りきれてなかったことや学生からの出し物をする際の位置の確認不足、叱るか否かという見極めの必要性が挙げられる。先生方の盛り上げ方や指示の仕方は大変参考になった。

(社会科教育専修 2 回生 北野結衣)

初めての野外活動支援でとても緊張した。コロナ禍でゲームに様々な制限があり苦戦したが最終的に児童たちが楽しんでくれているようで良かった。雨天でキャンプファイヤーが中止になり予定時刻より早く終わるなどトラブルもあったが、飛鳥小学校の先生方のおかげで乗り切ることができた。雨天のため、館内での活動が多く指導が必要な場面があったが、大半の児童が素直に従ってくれたので良かった。これからも活動を続けていくと様々なイレギュラーがあると思う。臨機応変に対応できる力をこのような活動を通じて身につけたいと思った。

(心理学専修 2 回生 木村直樹)

奈良市立伏見小学校 野外活動支援 報告書

音楽教育専修3回生 佐藤こころ

1. 実施日 令和3年11月12日（金）
2. 場所 奈良県立野外活動センター
3. 参加者 英語教育専修4回生 下原舞
音楽教育専修3回生 佐藤こころ
英語教育専修2回生 川口綾菜
奈良市立伏見小学校 第5学年児童、引率教員複数名

4. 概要

令和3年11月12日金曜日、奈良県立野外活動センターにおいて、奈良市立伏見小学校第5学年の野外活動が行われ、本学学生3名がその支援に当たった。例年は宿泊を伴う活動を行っているが、今年は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、日帰りの活動となった。キャンプファイヤーでやるようなゲーム、勾玉作り、アスレチックなどの支援を行った。支援の具体的な内容は、キャンプファイヤーでやるようなゲームの運営と勾玉作りとアスレチックの補助であった。

5. 参加学生による振り返り

私はキャンプレクリエーションのサポートを担当した。キャンプファイヤーで行うようなゲームを屋内で子どもたちに体験してもらおうという内容だった。施設の方がゲームリードを担当してくださったが、子どもたちの反応を見ながらゲームの順番や構成を臨機応変に変えたり、体を動かさずゲームの後で疲れている様子を見て、座ってできるゲームに切り替えたりと、柔軟な対応が印象的だった。臨機応変に対応できる引き出しを自分も身につけたいと思った。
(英語教育専修4回生 下原舞)

私はアスレチックのサポートを担当した。森の一本道に様々な形状の遊具が立ち並んでおり、児童は目を輝かせながら真剣に挑戦していた。班員全員が終えるまで待ちきれず先に進んでしまう児童がいたが、全員が無事に渡れるよう、コツを教えたり応援したりしている児童も見られた。先に進んでいた児童が戻ってきて班員に謝る場面もあり、児童たちは協力の大切さや自然の雄大さを体感することができたと思う。私自身も、児童が自ら気づき変容する姿を見て、野外活動の意義を実感することができた。
(英語教育専修2回生 川口綾菜)

私は、勾玉作りのサポートを担当した。勾玉作りのキットを配ったり、児童が勾玉を作る際の補助を行ったりするという内容だった。勾玉作りを楽しんでいる児童や勾玉作りが得意でない児童など様々な様子の児童が見られた。やる気をなくしてしまった児童に勾玉作りが得意な児童が励ます場面もあり、教師が声をかけることも大切であるが、児童同士で励まし合うことの大切さを実感することができた。私自身も、教員になったときは、児童同士で励まし合い協力できる場面を設けようと思った。

(音楽教育専修3回生 佐藤こころ)

添上高等学校人文探究コース連携事業 報告書

音楽教育専修3回生 佐藤こころ

1. 実施日 令和3年12月13日(月)
2. 参加者 社会科教育専修3回生 根本優、岡本真実、木村萌々香
音楽教育専修3回生 佐藤こころ
添上高等学校人文探究コース生徒 13名
添上高等学校引率教員 4名
中澤静男准教授
大西浩明特任准教授
企画連携課職員 2名

3. 概要

令和3年12月13日(月)、添上高等学校の人文探究コース連携事業が行われ、本学学生4名がその支援にあたった。添上高等学校普通科人文探究コースにおける探究活動で行われたフィールドワークに同行した。東大寺コースと奈良町コースの二つに分かれ、フィールドワークの補助を行った。主な活動内容は、生徒の引率とフィールドワークの様子の写真撮影であった。

・東大寺コース概要

東大寺コースは、南大門から大仏殿に向かい、そこから二月堂に行き見学するというルートだった。生徒は考えたことを真剣にメモをとったり、感じたことや気づいたことを生徒同士で交流したりしており、学びを深めている様子だった。

・奈良町コース概要

奈良町コースでは、元興寺・奈良町にぎわいの家・奈良町資料館・庚申堂・からくりおもちゃ館・鎮宅霊符神社・元興寺塔跡に言った。生徒は、真剣に話を聞いたり、実際に触ってみたりするなどをして、奈良町について学んでいる様子だった。

4. 参加学生の振り返り

・東大寺コース

東大寺コースは主に大仏殿と二月堂を主に見学した。職員さんの話を聞きながらメモを取り、感じたことや考えたことを素直に生徒同士で話し合っている姿が印象に残った。熱心に見学しているため、移動しているときに列が伸びてしまいそうな場面が何度かあった。一生懸命学んでいるところの邪魔をしたくないが、スムーズにフィールドワークができるように声かけをしなければならないので、そのときにどのような声かけをしてあげればよいのか考えるきっかけになった。

(社会科教育専修3回生 根本優)

このフィールドワークでは、生徒たちが何にでも興味を持つことができるということを再確認することができた。私が参加した東大寺コースでは、大仏殿や二月堂を見学した。大仏殿では、普段なら入ることができない場所に入ることができた。そこでは、生徒たちが楽しそうに見学している様子を見ることができた。生徒たちの興味を持ち、考え、他の人に共有するという過程を見て、興味を持てるような工夫をすることが大切なのではないかと気づくことができた。

(社会科教育専修3回生 木村萌々香)

・奈良町コース

このフィールドワークで学んだことは、子どもは想像力豊かな視点を持っているということだ。元興寺や様々な場所で学んでく中で子どもたちは自分の視点を変えて観察するなどして当時の人々の暮らしや考え方について自分なりに考えていた。中には大人でも気づかない部分もあったため、刺激を受けた。また、子どもの安全を守る大人としてのあり方、注意のしかたについても実践的に学ぶことができたと思う。

(社会科教育選手3回生 岡本真実)

このフィールドワークを通して、生徒が訪れる場所全てに興味津々に観察したり、話を聞いたりする様子が印象に残った。生徒の様々な視点で楽しみながら学ぶ姿から、学習することにおいて楽しむことの大切さを学ぶことができた。また、フィールドワークにおける安全面の確保についても学ぶことができた。楽しみながら学ぶ生徒の邪魔にならない声のかけ方についても考える機会となった。

(音楽教育専修3回生 佐藤こころ)

2021 年度近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会

ESD 子どもフォーラム 報告書

音楽教育専修 3 回生 佐藤こころ

1. 実施日 令和 3 年 12 月 25 日 (土)
2. 場所 奈良教育大学本部 大会議室
3. 参加者 国語教育専修 4 回生 西條秀哉
教育学専修 2 回生 中家麻弥
英語教育専修 1 回生 大矢真央

4. 概要

令和 3 年 12 月 25 日 (土)、奈良教育大学本部棟大会議室において、近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会のプログラムの一つである ESD 子どもフォーラムが行われた。本学学生 3 名がその司会進行を行った。子どもフォーラムでは、奈良市立朱雀小学校と長浜市立高時小学校、橋本市立あやの台小学校、奈良教育大学附属中学校の児童生徒がそれぞれの取り組みの発表を行った。

5. 参加学生による振り返り

子どもフォーラムの司会進行をするにあたって、児童生徒の発表をよりも近くで見ることができた。当日は円滑な進行と積極的に話を振ることに全神経を注いでいたため、緊張と焦りが大きかったが、発表の後の感想や質問など 4 年間の SDGs の学びを十分に生かすことができた司会進行だったと感じている。また、各小学校の発表にも非常に驚かされた。活動内容に関しても、ただ先生が指示するから行ったのではなく、環境や地域について考えた上で児童たちから行動している姿が非常に素晴らしいと感じた。発表の仕方についても、様々な工夫や力強い声、役割分担など、一人一人が活動に自信と誇りをもっている様子が伝わってくるような発表で大変感動した。(国語教育専修 4 回生 西條秀哉)

子どもフォーラムの司会をさせていただき、とても貴重な体験となった。ユネスコスクールの子どもの学校の学校で実際に行っている ESD 実践の紹介を聞き、ユネスコスクールの一員として同じ立ち位置で真剣に地球について考えている姿にとっても勇気をもらった。小中学校の段階から、ESD に興味を持ち取り組みを行っていくことは、必ずこれからの未来に繋がることであるため、どの取り組みも素晴らしいことだと感じた。私たち大学生も、ESD の実践を多くの人に広め、未来に向けてこれからも活動していきたいと改めて思った。(教育学専修 2 回生 中家麻耶)

子どもフォーラムの司会をさせていただき、どのような司会進行を行うと円滑に進むのか学ぶことができた。進行をして、司会者は発表を受けて簡単に感想を言いながら次に進むことで発表者への気持ちを伝えることが大切だと感じた。また、子どもたちの発表から、子どもたちが ESD を通して何を考え、何を学び、どのような力を身につけるのか知ることができ、とても良い機会をいただけたと実感した。地域のことから地球規模の問題にまで広げた ESD の学びを自分たちの言葉で発表し、発信しようとしている子どもたちを司会の立場から側で支えることができ、とても貴重な経験となった。私はこの経験をこれからの活動に活かし、司会も ESD の学びも積極的に取り組んで発信できるようにしていきたい。

(英語教育専修 1 回生 大矢真央)

第4回集まれ！ESD 子ども広場

社会科教育専修 3 回生 岡本真実

◆ 概要

第4回「集まれ！ESD 子ども広場」が令和3年12月2日、6日、7日、9日の4日にわたって行われた。これは、平成30年度から近畿ESDコンソーシアムの事業として行っている、1日を通してESDを体験的に学び合う行事である。例年は、奈良教育大学に子どもたちを集めて行っているが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のリスクに鑑みて、今年度は伏見小学校の5年生に2単位時間の出前授業を行う形で実施した。1日につき1学級でそれぞれ異なる学生が授業を行い、私は6日班の企画作りを行った。

◆ 自分で考えたこと

本活動を通じて学んだことは3つある。1つ目に計画性の大切さ、2つ目に情報共有の重要性、3つ目に企画者としての意識である。

まず、計画性の大切さについてだ。例年とは違い、各グループで指導案の作成や工作で使う準備物を用意していった。その中で授業までの時間がなかったのにも関わらず、指導案の内容の決定や準備物の作成が授業日の前日までかかっていた。これには、企画者それぞれがよりよいものを作り上げていきたいという思いがあったことも要因の一つとして挙げられるが、企画者自身が準備物を把握できていなかったことや計画的に時間を有効活用することができていなかったことが原因であった。そのため、授業日になってまで準備ができていなかっただけでなく、リハーサルをしない状態で授業をしてしまった。このことから、本活動を計画的に動かしていくためには、企画者が企画内容について把握することや計画的な動きを一度情報共有しておくことが必要になっていくだろう。

次に、情報共有の重要性についてだ。事前研修や企画班での会議を行っていく中で企画の内容やその意図についての情報が伝わっておらず、意見の食い違いが起こっていた。さらに、6日班の中でも仕事の分担や作成していたスライドの内容が明確になっていないこともあった。これには、企画全体での情報共有ができていなかったと言える。このような事態に陥らないようにするためには、企画の意図を企画作成段階で明確にしていくことや会議で行った内容等といった情報をグループ内で共有していくことが必要になっていくだろう。

最後に、企画者としての意識についてだ。今まで様々なESDに関わる活動や企画に参加してきたが、企画者として安全に企画を進めることに重点を置いていた。しかし、本活動ではその意識だけでなく、子どもたち自身が体験などを通じて見方・考え方について深く考えられるようになるかという部分にまで意識を持っていった。これにより、子どもたち自身の発達段階や効果的な発問の仕方など大学生活やボランティア活動で得た知識というものを活用した企画を作ることができた。それにより、子どもたちの反応からも企画内容での意図を伝えられただけでなく、ESDで重視している行動化につながられる活動になったと感じた。そのため、企画者として人に何を伝えたいのか、また何を感じさせていきたいのかということを確認していくことが重要となるだろう。

第4回集まれ！ESD 子ども広場

教育学専修2回生 木下結等

◆ 概要

第4回「集まれ！ESD 子ども広場」が令和3年12月2日、6日、7日、9日の4日にわたって行われた。これは、平成30年度から近畿ESDコンソーシアムの事業として行っている、1日を通してESDを体験的に学び合う行事である。例年は奈良教育大学に子どもたちを集めて行っているが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のリスクに鑑みて、今年度は伏見小学校の5年生に2単位時間の出前授業を行う形で実施した。1日につき1学級でそれぞれ異なる学生が授業を行い、私は9日班の企画作りと当日の運営を行った。

◆ 自分で考えたこと

今回の子ども広場を通して学んだこと、感じたことを3点述べたい。第1に全員で何かを考えて取り組むことの難しさ、第2に子どもたちは常に成長しているということ、第3にコロナ禍に直接子どもたちと触れ合う喜びについてである。

最初に、全員で何かを考えて取り組むことの難しさについてだが、今回の企画は30人を超える大学生が携わっていることで、企画を作る際に意見の話し合いが難航したり、役割分担が上手くいかなかったりすることがあった。また、自分が担当する日程の班での話し合いでも授業の流れを考えるにあたって上手に授業展開を考えることが出来ないということも起こった。しかし、それでも先輩方や同級生、後輩たちと協力して何度も話し合いを重ねながらどうにか一つのものを作り上げることが出来た。全員で何かを考えて取り組むことの難しさ、そしてそれを乗り越えた時の達成感をこの子ども広場で感じる事が出来た。

次に、子どもたちは常に成長しているということについてだが、このことを感じる事が出来た場面があった。それは授業の中でハサミとのりを使って工作を行う場面でのことだ。そこで周りの子どもよりも作業が遅れていた子どもがいた。私はその子どもをサポートするために一緒に作業をした。最初は私がほとんどの作業を手伝っていたものの、出来ていることをしっかりと褒めてあげると徐々にその子の取り組む速度も速くなり、最終的には私の助けなしでも周りの子に追いつくことが出来た。このことからよく言われていることではあるが、子どもたちは常に成長しており、出来なかったことも少しずつ改善したり、出来るようになったりするという事を身をもって体験した。

最後に、コロナ禍に直接子どもたちと触れ合う喜びについて述べる。私自身、大学に入ってから子ども広場に参加したのは初めてで、子どもたちと直接関わる企画は今まであまりしてこなかった。そのような中、この子ども広場では、自分たちが一生懸命考えた授業に対して子どもたちが一つ一つ反応してくれたり、休み時間や授業の終わりに話しかけてくれたりして、子どもたちの「面白い！」「楽しかった！」という声をたくさん聞くことが出来た。コロナ禍という今までとは違う中で行われた子ども広場だったからこそ、今まで以上に子どもたちの前に立って直接触れ合い、交流するという事の喜びを感じることが出来たと感じた。

以上の三つが本企画で私が学んだこと、感じたことである。

◆ 自分で発展させたいこと

コロナ禍でも歩みを止めることなく今自分たちに出来ることは何なのかということを考えてうえで、このような多くの学びそして、様々な方の支えのもと成功させることが出来た。今回の子ども広場に携われたという経験を今後活かしてよりこれからの活動に還元していきたいと思った。

第4回集まれ！ESD 子ども広場

英語教育専修 2 回生 川口綾菜

◆ 概要

第4回「集まれ！ESD 子ども広場」が令和3年12月2日、6日、7日、9日の4日にわたって行われた。これは、平成30年度から近畿ESDコンソーシアムの事業として行っている、1日を通してESDを体験的に学び合う行事だ。例年は奈良教育大学に子どもたちを集めて行っているが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のリスクに鑑みて、今年度は伏見小学校の5年生に2単位時間の出前授業を行う形で実施した。1日につき1学級でそれぞれ異なる学生が授業を行い、私は7日班の企画作りを行った。

◆ 自分で考えたこと

今回は、上記のように4班に分かれたものの、合計36人で一つの企画を完成させることとなった。中でも進行役の方々は、定期的に情報共有や質問の機会を設けたり、ホワイトボードやパソコンを活用して可視化したりすることで、班の間に授業内容の大きな差や誤解が生じないように工夫しつつ意見をうまく融合させていた。

また、先に実施した2日・6日班のフィードバックを基に、実際の児童の反応を参考にしてより効果的な授業になるよう改善することができた。このように、大人数の協力によって大きな成果を得たことで、協力することの意義を実感することができた。

企画段階で出た案について、私は改善する必要があると思ったものでも他の班員は時間をかけて何度も考え直し、最終的にはより良いものへと改善していった。私は企画作りのみで実際に授業に参加することができなかったが、当日の録画から、班員の児童に対する真剣な態度が伝わってきた。

この経験から、私は、授業に込められた思いや精密さ、あるいは詰めの甘さや妥協は、授業を受けた者にも伝わると考えるようになった。主観的に判断せず様々な視点から批判的に捉え、向上していくことが大切であると学ぶことができた。

以上のように、私はこの企画を通して自身の見方・考え方を広げることができた。今回学んだことを生かし、今後は協調性や広い視点、向上心をもって取り組んでいきたい。

◆ 自分で発展させたいこと

今回の授業では、様々な見方・考え方があるということを理解してもらうことが目標であった。しかし、授業の構想を練る中で、私自身の見方・考え方が偏っていることに気づかされた。また、私は、児童の思考の流れに沿って考えるよう意識したのだが、児童の実態を想像することに大変苦労した。授業後のワークシートを見ると、私たちの意図が伝わっていたと思われるが、他の班員のフィードバックや助言がなければ目標を達成することができなかったと考えられる。これからは、児童の視点を意識しながら、どうすればうまく伝えることができるのかを児童との関わりの中で模索していきたい。



第4回集まれ！ESD 子ども広場

社会科教育専修 2 回生 北野結衣

◆ 概要

第4回「集まれ！ESD 子ども広場」が令和3年12月2日、6日、7日、9日の4日間にわたって行われた。これは、平成30年度から近畿ESDコンソーシアムの事業として行っている。1日を通してESDを体験的に学び合う行事である。例年は、奈良教育大学に子どもたちを集めて行っているが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のリスクに鑑みて、今年度は伏見小学校の5年生に2位時間の出前授業を行う形で実施した。1日につき1学級でそれぞれ異なる学生が授業を行い、私は2日班の企画作りと当日の運営を行った。

◆ 自分で考えたこと

本活動を通し、私が考えたことを3つ述べる。1つ目に目的を意識した企画作りについて、2つ目に児童の前に立つ上で心がけること、3つ目に児童への指示の仕方について考えをもつことができた。

第1に、何を目的として行うのか意識した企画作りについてである。導入から展開、まとめへと繋がっていくなかで、児童が自分事として「いろいろな立場に立って考えると色々な見方や考え方があがある。」と捉えさせるために、これからの学校生活や日常生活の中で実践していけるように企画を作っていた。しかし、いざ学校生活や日常生活に当てはめて児童自身で考える時間になった時に、児童自身の考えを引き出す質問や話しかけ方に悩んだ。児童は、それまでのトリックアートを主とした活動と日常生活に当てはめて個人で考える活動を繋げて考えづらかったのではないかと思う。児童が考えやすくするためには、児童の姿や発達段階を考慮し、児童自身の考えを引き出せるような発問や個々へ支援する際の質問や例え話等を交えて接することが大切だ。

第2に、児童の前に立つ上で心がけることについてである。私は、導入のトリックアートとは何かという部分の授業を行った。児童にこれから始まる授業に期待をもたせるため、明るく大きな声で話すことを心掛けた。しかし、想像以上に緊張したこともあり、児童からの反応を引き出すことに精一杯で学級全体を見渡して進めることができなかつた。学級全体に発問して、手を挙げる活動を取り入れたり、児童の興味関心のあることを導入として持ってきたりするなど工夫する必要を感じた。発言を積極的にする児童にばかり目が行きがちだが、学級全体に話していることを意識して児童の前に立つことが大切だと思った。

第3に、児童への指示の仕方についてである。今回、活動が始める際に机の上を片付けることを指示しなかつたことで、工作の時間やワークシートを使った学習をする際に机から物が落ちたり、何かの物の上で書いたりする児童がおり、集中力を欠いたり騒がしくなる要因になっていた。個々には声掛けをしたが、全体として今必要なものだけが机にあるという状態を作るべきだったと思う。あらかじめ、用意するものを指示した際に、活動に不要な物を片付けることや活動毎に指示をすると児童が集中力を欠くきっかけになることも減らせると思った。メリハリをつけるためには、一度机の上の物を片付けるように指示をして、児童の考えやモードを整理する必要があると考える。

第4回集まれ！ESD 子ども広場

◆ 概要

2021年12月6日、奈良市立伏見小学校5年生への出前授業

見える世界、広がる視点というテーマを基に、トリックアートや風刺画を見ることを通して、多面的・総合的に考える力をつける活動

◆ 自分で考えたこと

私は、本活動で6日に行う授業の企画と運営を行った。そこでは、人と人が向き合うことの大切さと授業へのこだわりを持つこと、机間指導の難しさを学ぶことができた。

まず、人と人が向き合うことの大切さについて述べる。本活動はオンラインで会議を重ねることが多く、相手の表情や感情が対面時と比べて読み取りにくいことで、企画に対する認識や想いの不一致が起きてしまった。今までは人と人が向き合っただけで企画を作り上げてきたのでその大切さを実感した。

次に、授業へのこだわりを持つことの大切さについて述べる。私は、本活動の最後の取り組みである「学んだことを行動化にうつす」場面を担当した。トリックアートや風刺画を通して学んだことをどのように行動に移すかで悩むことが多かった。そこで、ペープサートを用いて発問をすることにした、このことから、ペープサートなどを用いて、子どもたちが身近に感じられる工夫をすることと授業に対するこだわりや想いを持つことが様々な工夫につながると実感した。

最後に、机間指導の難しさについて述べる。やる気のない子どもたちやわからない子どもたちなど、様々な児童がいた。私の声掛けで、さらに混乱してしまう子どももいたので、どのような言葉を選ぶのかを瞬時に判断しなければいけないと感じた。また、子どもたちの集中力が切れてしまった原因やわからなくなってしまう原因などを考え、適切な声掛けを行うことが大切であると考えた。

以上3点が本活動で学んだことである。教員を目指す上で必要な能力やコロナ禍でも柔軟に対応し、企画を行うことの大切さを学んだ。今回学んだことをこれからの学生生活や教員になったときに活かしていきたい。
(音楽教育専修3回生 佐藤こころ)

◆ 自分で考えたこと

企画を進める中で、リーダーや幹部との連携や、他の班との連携、自分の班内での連携の重要性を感じた。連携を大事にしておく、自分たちの班だけでなく他の班の企画を良いものにした、お互いの仕事を助け合ったりすることができることを学んだ。また、企画の内容を考える際、一昨年は外での活動を中心に、今年は教室内での活動を中心に考えたが、どちらにも安全面の配慮や時間配分など気をつけなければならないことは変わらないと学んだ。

◆ 自分で発展させたいこと

子どもたちと実際に関わる際に、関わり方や進行の仕方についてもっと技術力をつけたいと感じた。教育実習やボランティアなどで子どもたちと関わったり、前で授業をしたりしたものの、やはり前に立って喋ったり、子どもたちと関わったりしようとする、他のこともやらなければいけないと考えながらでは十分に子どもたちのことを見ることができていないと感じた。子どもたちの様子や反応を見ないと良い授業や信頼関係は築けないと思うので、子どもたちとの関わり方や進行の仕方についてもっと学んで、技術を磨けるようにしたい。
(社会科教育専修3回生 長滝谷幸子)

第4回集まれ！ESD 子ども広場

◆ 概要

小学校を訪問して、見方考え方を広げてもらう授業を行った。これは、平成30年度から近畿ESDコンソーシアムの事業として行っている、1日を通してESDを体験的に学び合う行事だ。例年では、子どもたちを大学に呼んで、活動を行うが、今年は新型コロナウイルス感染症対策としてこちらが小学校を訪問する形をとった。私は企画のみの参加となった。

◆ 自分で考えたこと

私は、授業を作ったり、大勢の人の前で授業を行った経験がなかったため意見を出したり、考えたりするのがとても難しかった。どのように授業展開を行なっていくのか、どういう声かけをしてあげればスムーズに子どもたちが考えられるのか想定することが想像以上に難しかった。

反省点としては、書道科の都合で多忙な時期だったためあまり会議に参加できなかったため、次回、参加するときは時期を見定めてよく考えて参加しようと思う。

(書道教育専修1回生 栗垣実咲)

◆ 概要

第4回「集まれ！ESD 子ども広場」が令和3年12月2日、6日、7日、9日の4日にわたって行われた。これは、平成30年度から近畿ESDコンソーシアムの事業として行っている、1日を通してESDを体験的に学び合う行事である。例年は、奈良教育大学に子どもたちを集めて行っているが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のリスクに鑑みて、今年度は伏見小学校の5年生に2単位時間の出前授業を行う形で実施した。1日につき1学級でそれぞれ異なる学生が授業を行い、私は7日班の企画作りと当日の運営、企画のリーダーを務めた。

◆ 自分で考えたこと

この子ども広場を通して、今までの子ども広場とは異なる、新たな子ども広場の方法を実践できたと思う。子ども広場では授業形式であり、初の試みだったため、学生もどのようにして授業を進めていくのか、他の班と内容をどのようにして合わせておこなうのか、どのようにして各班の特色を出していくのか、一致団結しにくい状況だからこそ、模索する形となり、これからは活かせることがたくさんあると思う。

◆ 自分で発展させたいこと

私はこの企画でリーダーとして参加したが、正直、反省点が多くある。私のリーダーとしての決断力の無さや行動力の無さがきっかけで各班の学生に迷惑をかけてしまった。これからは、どのようにしていきたいのか、はっきりと自分の意見をもって行動し、周りの意見もしっかりと聞くということを今よりも心掛けて行動していきたい。

(社会科教育専修3回生 加藤真由)

あつまれ ECO キッズ！啓発教材制作事業

英語教育専修 2 回生 川口綾菜

◆ 概要

あつまれ ECO キッズ！啓発教材制作事業として「小学生向けの気候変動対策教材・啓発ツール」として動画を作成しました。また、2021 年 12 月 18 日にならまちセンターで開催された ECO キッズの企画に参加し、ネイチャーゲームの手伝いなどを行いました。

◆ 自分で考えたこと

・教材作成について

私は水筒とペットボトルを例に、プラスチックの与える環境負荷についての動画を制作しました。以前は気候変動を深刻に捉えておらず自分の利益だけを考えて行動していたのですが、調べるにつれて早急に取り組んでいかなければならない課題であると強く思うようになりました。今後は視点を広げ、自身の行動を見直そうと思います。制作する中で苦勞した点は、子どもたちにとって興味をもちやすくかつ分かりやすい伝え方です。また、水筒とペットボトルのどちらが良いかという 2 択で終わらさず、子どもたちがエコな工夫を他にも見い出せるよう動画の終わり方も工夫しました。この動画が、気候変動に危機感を抱き、価値観や行動を変容するきっかけになれば嬉しいです。

・当日について

私は主にブンブンごま作りのサポートをしました。作り方は簡単でしたが、子どもたちは「回すとどんな模様になるのだろう」、「どうすれば回しやすくなるのだろう」と主体的に考え工夫していました。中には、何個か制作し試したことで、牛乳パックに開ける穴の位置によって回しやすさが変わると発見した子どもがおり、大変驚きました。また、子どもたちにとってブンブンごまを回すことは少し難しかったようですが、家族や友達と教え合いながら真剣に取り組んでいました。保護者の方々が「昔あんなにやったのにな」、「昔はできたんだよ」と夢中になって子どもたちと張り合う場面も見られ、世代を越えて繋がる良いきっかけになったと感じました。今回の企画を通して、子どもも大人も昔ながらのエコなおもちゃの楽しさを知り、身近な素材を活用する可能性を見いだせたのではないだろうかと思います。

◆ 自分で発展させたいこと

今後は気候変動について自身の考えを深めるとともに、どうすれば子どもたちに効果的に伝えられるのかを考えていきたいです。今回制作した動画は、真剣に見てくださる大人が何人かいらっしゃいましたが、子どもにはあまり受けませんでした。また、ブンブンごまやぱっちゃんがえるの制作を通して、電気を使わない昔のおもちゃの楽しさを実感してもらえたと思いますが、エコと繋げて説明することはあまりできず、ただ作って遊んだだけになってしまったように感じます。次回は動画をもう少し簡単・短くしたり、クイズ大会をしたりして、子どもたちに効果的に伝える方法を模索していきたいです。

あつまれ ECO キッズ！

◆ 概要

あつまれ ECO キッズで！では、子ども目線で楽しく取り組めるエコライフについて体験し、知り、楽しむことを目的に開催されたイベントである。この企画では、実施されるプログラムを広く環境をテーマにしながらも「クラフト系」「遊び系」「学び系」の三つに分類がされており、また温暖化防止啓発の COOL CHOICE を意識しながらも「エネルギー」「3R」「自然環境」「衣食住」などにも紐付けたものを意識した作品展示などが行われていた。その中で、ユネスコクラブでは「フードロス」などに関する動画の発表と牛乳パックを再利用した工作として、ブンブンゴマとパッチンガエルの二つの作成の説明を行った。さらに、14時から15時に行われた紙飛行機大会の司会などもお手伝いした。

◆ 自分で考えたこと

今回の企画で学んだことは二つある。

一つ目は、昔ながらの遊びによって子どもだけでなく、大人も楽しめていたということである。ブンブンゴマやパッチンガエルをブースにて説明することや紙飛行機の作り方についても大会の途中で説明をした。その中で、子どもたちはおもちゃを作ることができるという楽しさ、面白さに興味が引かれており、それぞれで工夫した世界で一つだけのものを作って楽しんでいた。それに対し、大人は昔ながらのおもちゃに懐かしさを感じていたこともあり、子ども以上に張り切って遊んでいる人が多かった。これにより、家族内での会話が増えていたりしていたことから、エコを学ぶだけでなく、子どもとの関係づくりまで影響を与えていると感じた。

そして、二つ目は、各団体での特徴のある展示からエコというものを多角的に見ることができたということである。今まで単純に家庭でできることだけで精一杯行うしかないと感じていた部分があった。しかし、各団体の様子を見ていく中で生活に関わるだけでなく、教育の面からの理解の増進や森林に対する理解とその保護への参加など多種多様な取り組みに参加することで自分なりのエコへの活動を行うことができると感じた。そのため、今後奈良市での活動等を自分で調べていき、より深い理解と行動につなげていきたい。

◆ 自分で発展させたいこと

自分でもエコに関する知識について様々な経済団体やNPO法人での活動から知ることができたので、これを生かした授業づくりというものをしていきたい。また、様々な体験から学びを得られるような企画にまた参加していきたい。
(社会科教育専修3回生 岡本真実)

◆ 概要

- ・子どもたちが取り組んだECOを発表する式典のブース展示コーナーの一面として参加。
- ・発表後の子どもたちが遊ぶ場となった。

◆ 自分で考えたこと

- ・児童とともにECOを感じておもちゃを作るという活動ができた。
- ・ブンブンゴマとパッチンカエルの作り、家に帰ってからも遊べるように工夫していた。
- ・ブンブンゴマの回し方を教えることができ面白かった。
- ・遊びは新しいものを買うだけでなく、様々なものを有効活用して工夫を加えて作り出すものでもあるということを改めて感じた。これから遊びの伝道師になれるように努めていきたい。

(教育学専修3回生 岩城雄大)

あつまれ ECO キッズ！

◆ 概要

奈良市が主催している奈良市内の小・中学生を対象に募集した「おしえて ECO キッズ！」の優秀作品の表彰と作品展示に合わせて、「たのしく ECO を学ぶ」イベント ECO キッズのブースコーナーの運営と紙飛行機大会の運営を行った。

◆ 自分で考えたこと

今回の ECO キッズで、おもちゃ作りブースと紙飛行機飛ばし大会の司会・進行をさせていただいた。牛乳パックで作ったブンブンゴマとパッチンカエルのおもちゃ作りのブースでは、多くの子どもたちが試行錯誤しながら、こうしたらもっとパッチンカエルが飛ぶのではないかと、ブンブンゴマがもっと早く回るのではないかとということについて考えながら楽しく遊んでいた。また、紙飛行機飛ばし大会の司会・進行も先輩方に助けていただきながらやらせていただき子どもたちにとっても私自身にとってもとてもいい経験が出来た 1 日だった。

◆ 自分で発展させたいこと

実は自分自身は 2 年連続の参加ということになったが、前はコロナの影響で自宅からオンラインで見守った形になり、今回初めて対面で参加させていただいたが、まだまだ力量不足でうまくおもちゃが出来ない子どもも出てきてしまったので、もっと学んで来年度以降に繋げていきたい。

(教育学専修 2 回生 木下結等)

◆ 概要

令和 3 年 1 2 月 1 8 日土曜日、ならまちセンターで「あつまれ ECO キッズ」が開かれた。ユネスコクラブは牛乳パックで作ったおもちゃの工作ブースの出店と、紙飛行機大会の司会進行、ならまち資料館への子どもの誘導などの役割を担った。また、工作ブースには事前に制作した、児童に環境問題を考えさせるための動画を上映した。

◆ 自分で考えたこと

用意していた工作用キットが無くなりそうなほど、想像以上に子どもたちが来てくれて嬉しかった。低学年にはパッチンカエル、高学年にはぶんぶんゴマのウケがよく、「学校でもつくる！」と語ってくれている子どもがおり、やりがいを感じた。また、事前に制作した動画は、つくるのに大変苦労したが、前に椅子を用意していたからか、子どもたちがよくみてくれて、良かったと思う。

来年度も機会があれば、参加し、学びを深めたり広めたりしたい。

(国語教育専修 2 回生 川田大登)

◆ 自分で考えたこと

夢中になって遊んでいる子どもが多くいたことが印象的だった。中には、「牛乳パックを再利用できているね。」と自ら気づいている子どもがいて非常に驚かされた。身の回りにある使わなくなったものでも、工夫することで、楽しく遊べるおもちゃに変身することに気づいてもらえてうれしかったし、自分自身も改めて気づくことができた。また今年の ECO キッズはオンライン開催で、画面越しでの子どもとの交流だったが、今年是对面で開催された。対面では子どもたち同士でどのようにやったらうまくパッチンカエルを飛ばすことができるのか、ブンブンゴマを回すことができるのかを教え合っている様子が多く見られた。このことから対面でやることによって多くのコミュニケーションが生まれることが分かり、対面で実施する意義と大切さを実感することができた。

(社会科教育専修 3 回生 根本優)

奈良市立飛鳥小学校 野外活動支援

◆ 概要

奈良市立飛鳥小学校第5学年の野外活動を支援する。

クラフト、館内オリエンテーリング、キャンドルファイヤーの取り組みの際に児童への支援、企画進行を行った。

◆ 自分で考えたこと

2年ぶりの野外活動支援ということで、少々緊張感があったが、最終的には児童、学生、教員がともに楽しみ、友情が育まれたいい活動になったと考えている。突飛で危ない行動をする児童にも、手段の提案や声掛けをして危険を回避するように仕向けたり、話を聴くときは聴き、はじけるときは思い切りはじけるという緩急・メリハリもつけられていたりしたと考えている。ユネスコクラブが代々歌い継いできた「火命民」も事前指導の時よりも盛り上がっていたので、嬉しかった。応援に駆けつけてくださった先生方のゲームも面白かった。私もアドリブに対応できるようにしていきたいと考えている。

振り返りの話し合いで改善点はいくつか挙げられたが、叱り方や立ち回り方等、私たちがさらに研鑽していくべきことだった。

これからESDティーチャーになろうとするにあたって、さらに研究をしていきたいと考えている。

(教育学専修3回生 岩城雄大)

◆ 概要

奈良市立飛鳥小学校第5学年2クラスの野外活動支援を行った。雨天のため、午前は館内で木工クラフト、午後は館内オリエンテーションとキャンドルファイヤーを行った。学生はそのときに児童への支援やゲームを企画して児童たちを補助した。

◆ 自分で考えたこと

初めての野外活動支援で流れが分からなかった為とても緊張した。また、キャンプファイヤーの時のゲームを企画したがコロナ対策で密になることが出来ないため、かなりゲームも工夫する必要があった。加えて、当日は朝から雨だったので予定が大幅に変更されスケジュールが大きく変わった。

児童たちは雨天のため館内での活動になったが、とても楽しそうにオリエンテーションやクラフトをしていた。途中、危険な行動をする児童がおり注意をすると聞くが、離れるとまた同じことを繰り返していた。そのため、叱り方に改善が必要であると思った。また、キャンドルファイヤーでゲーム説明の司会をしたが途中で緊張し、早口になってしまった。このように前で話す機会は教育実習など様々場面があると思うので平常心が必要だと感じた。事前指導で火命民を紹介して歌の練習をした。本番では児童たちが火命民の歌と踊りを覚えてくれており、楽しそうに踊って歌ってくれたので嬉しかった。今回は雨天のためキャンプファイヤーを経験することが出来なかった。キャンプファイヤーになると火の調節や児童が危険な行動をしないか監視するなど色々する事が増えると思う。もし次回野外活動支援に行く機会があれば是非今回の経験を活かしたいと思う。

(心理学専修2回生 木村直希)

奈良市立伏見小学校野外活動支援

◆ 概要

2021年11月12日、奈良県立野外活動センターで伏見小学校の野外活動支援を行った。奈良市立伏見小学校第5学年の野外活動支援、キャンプファイヤーをやるようなゲーム、勾玉作り、アスレチックの補助を行った。

◆ 自分で考えたこと

私は、今回の支援で勾玉作りの補助を行った。先生の補助や児童が勾玉を作る際の声掛けを行った。そこでは、様々な児童達の様子を見ることができた。思い思いのやり方で削る児童や寒さでやる気を失ってしまった児童、虫が怖くてなかなか作業に移ることのできない児童などがいた。この支援を通して、適切な声掛けの難しさを実感した。特に虫が怖くて作業に移ることのできない児童については、「大丈夫だよ」と声をかけても、一度失ったやる気を取り戻すには時間がかかった。その児童の友達が席を変えようかと声をかけてくれたことで徐々にやる気を取り戻し、作業に取り掛かることができた。また、作業を行う際に、児童同士が声を掛け合って取り組む姿が見られた。「〇〇君のめっちゃかっこいいやん」や「〇〇ちゃんあとちょっとで完成やん」などお互いに励まし合う姿見られた。その児童たちはとても楽しそうにやっている印象だった。自分がどのように声をかけるかも大切であるが児童同士の協力も必要であると考えた。
(音楽教育専修3回生 佐藤こころ)

◆ 自分で考えたこと

私はアスレチックのサポートを担当した。森の一本道に様々な形状の遊具が立ち並んでおり、子どもたちは目を輝かせながら真剣に挑戦していた。小雨が降っていたので足下が滑りやすかった上に、危険な遊具が多く、大人の私でも怖いと感じるほどだった。手をつないだり、下に回って「落ちてでも受け止めるから大丈夫だよ」と声をかけたりして、常に目を離さずに支援をした。中には、恐怖のあまり途中で身動きがとれなくなってしまった子どもや、班員全員が遊具を終えるまで待ちきれず、先に進んでしまう子どももいた。しかしその一方で、全員が無事に渡れるよう「そこに足をかけて!」とコツを教えたり、「がんばれ!」と応援したりしている子どもの姿も見られた。先に進んでいた子どもが戻ってきて班員に謝る場面もあり、子どもたちは協力の大切さを感じることができたと思う。また、小雨が森の木々をぬらしキラキラと輝いており、子どもたちは「きれい!」と見入っていた。子どもたちは自然との交歓を通して、自然の厳しさや美しさを体感することもできたと思う。私も、子どもたちが自ら気づき行動を変容させる姿を見て、野外活動の意義を再確認することができた。

◆ 自分で発展させたいこと

今回野外活動支援を終えて、子どもたちの怪我を防止することの大変さを感じた。小学生はどこからそんなエネルギーが出てくるのかと思うほど自由奔放で、私一人で何十人もの子どもを見ることができなかった。特に野外活動は自然の中で行うので、危険が隣り合わせである。子どもたちに自由に行動させよう、有意義な活動にしようと思えば思うほど、危険が増す。恥ずかしながら、子どもの怪我を防ぐべき立場の私が、雨に濡れた葉っぱで滑って転んでしまい、子どもたちにとっては良い反面教師になったと思うので良かったが、教師側も十分に自然を知って対策をとることの大切さを学んだ。今後野外活動支援を行う時は、自然や子どもとの関わり方についての知識を身につけた上で、安全対策に注意していきたい。
(英語教育専修2回生 川口綾菜)

近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会

英語教育専修 1 回生 大矢 真央

◆ 概要

2021 年 12 月 25 日、26 日に奈良教育大学で開催された「近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践勉強会」の 1 日目にスタッフとして参加した。

私は子どもフォーラムで司会を担当し、ESD 実践交流会 I では第 3 分科会のタイムキーパーを担当しながら、各学校の子どもたちや先生方の発表を聞かせていただいた。

◆ 自分で考えたこと

子どもフォーラムの司会をさせていただき、どのような司会進行を行うと円滑に進むのか学ぶことができた。進行にあたり、司会者が発表を受けて簡単に感想を言いながら次に進むことで、発表者への気持ちを伝えることが大切だと感じた。また、子どもたちの発表から、子どもたちが ESD を通して何を考え、何を学び、どのような力を身につけるのか知ることができ、とても良い機会をいただけたと実感した。地域のことから地球規模の問題まで広げた ESD の学びを自分たちの言葉で発表し、発信しようとしている子どもたちを司会の立場から側で支えることができ、とても貴重な経験となった。私はこの経験をこれからの活動に活かし、司会も ESD の学びも積極的に取り組んで発信できるようにしていきたいと思っている。

実践交流会からは、先生方がどのような意図を持ち、子どもたちに何を学び、何ができるようになってもらいたいのかについて知ることができた。私が印象に残った授業づくりは、山形県寒河江市立醍醐小学校の小関先生の慈恩寺を教材とした授業づくりである。慈恩寺について、醍醐地区だけのものではなく、市全体のものであるという認識をもとに地域の魅力を発信する ESD 実践の授業をされていることが分かった。子どもたちに慈恩寺について学んでもらい、考察してもらっただけでなく、慈恩寺のガイドをしている方の話を聞いたり、自分たちで足を運んだりして慈恩寺に詳しくなり、ガイドができるレベルにまで導いているところが魅力的に感じた。それは、学んだことを学校内での発表だけで終わるのではなく、最終的に実際に子どもたちに観光客へのガイドをしてもらうことで慈恩寺の魅力を発信できるような人材を育成しているからである。この点で他の学校の実践との違いを感じた。ガイドができるくらいに詳しく学び、パンフレットなども作り、一人一人が観光客にガイドをする経験をすることで、より自分たちの地域にある慈恩寺は自分たちの宝物で、大切にしないといけない、次の世代に繋いでいくべきものだという意識を持ってもらえると思う。地域性を取り入れた ESD 実践の授業づくりについて、この活動を通してどのような力を身につけてほしいかを考えながら、SDGs についても学ぶことができる授業を作ることができると分かった。

◆ 自分で発展させたいこと

子どもたちだけでなく、発表者の発表を受け止めたコメントができるようになることは、司会をする上でとても大切なことだと思うので、スムーズな進行ができるようになるためにも発表を聞く時はコメントを考えるように心がけようと思う。ESD 実践で子どもたちが学ぶことや身につける能力については、地域についての学習から地球規模の学習に繋げるなど、子どもたちが自分事化しやすいように導くことで ESD や SDGs について考えることができる人材を育成することができるのではないかと考えた。先生方の ESD の授業づくりでは、発表だけで終わることなく、学んだことを実際に活かすことのできる機会を設けることも大切だと感じた。今回、参加して学んだこれらのことを今後の活動に活かしていけるようにしたいと思う。

近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会

◆ 概要

25 日午前の ESD 子どもフォーラムに参加した。ESD 子どもフォーラムでは、奈良市立朱雀小学校、長浜市立高時小学校、橋本市立あやの台小学校、奈良教育大学附属中学校ユネスコクラブでの取り組みについて子どもたちが発表した。発表後、それぞれの学校の取り組みについての質疑応答や講評が行われた。

◆ 自分で考えたこと

朱雀小学校は原爆について、高時小学校は地域の水生生物について、あやの台小学校は環境について、奈良教育大学附属中学校はユネスコクラブとして取り組めることについて、それぞれ大人に話を聞いたり、他の学校と交流したりして調べたり学んだりしていた。何かを行動に移すためには、まずその現状や問題について知らなければ問題意識を持つことすらないので、行動を起こすことはできない。今回の四つの学校の発表を聞いて、改めてまず知るものの必要性があるのではないかと感じた。また、今回の発表ではどの学校も知ることにした後、そこで終わるのではなく行動を起こしており、行動化が大切だと考えた。さらに、今回の場のように学んで行動化したことを発信していくことで学びの連鎖が起こり、意識改革や行動改革が広がると感じた。

(社会科教育専修 3 回生 長滝谷幸子)

◆ 概要

2021 年 12 月 25、26 日に「近畿 ESD コンソーシアム成果発表会」が奈良教育大学で開催され、私は 25 日、26 日の運営として携わりながらそれぞれの発表を聴かせていただいた。

◆ 自分で考えたこと

二日間にわたり様々な発表がされていたが、やはり子どもたちや大人の方々が全員で ESD や SDGs に関連する様々な企画や授業等の取り組みをしていることを改めて感じた。長野県山ノ内町立南小学校の菅原先生の発表の中で、子どもたちは「ESD や SDGs は学校で習うものだ」と思っていたため、子どもたちが SDGs に熱心に取り組む大人の姿を見たとき、非常に驚いた様子であったという話がとても印象的だったが、まさにそのように今回の成果発表会は私自身すごく勇気をもらえ、これからも ESD や SDGs について学んでいきたいと思える良い機会になった



ASPnet Teaching Together GC4SD

◆ 概要

私はフィリピン人の学生二人と共に意見を交換しながら ESD に関する授業をつくった。Zoom でオンライン会議を 2 回開き、会話をする言語として英語をお互いに使用して学習指導案を作成した。そして、1 月 14 日(金)、ユネスコスクールである奈良教育大学附属中学校の 2 年 2 組と 2 年 4 組でフィリピンの学生とともに作りあげた授業を実践した。

◆ 自分で考えたこと

フィリピン人の学生二人と ESD の授業をつくるという経験を通して、フィリピンの ESD の考え方や授業構想の練り方を知ることができた。また、フィリピンで起こっている環境問題やそれを解決するための政策も知ることができた。日本だけでなく、海外の学生とも考えや意見を交換することで、ESD や SDGs をより多面的・多角的に捉えて考えることができた。また、フィリピン人の学生と英語を使ってコミュニケーションを取っていたので、自分の英語力も高めることができたと思う。私の得意分野である英語と ESD に関する知識の両方を活かすことができた。海外の学生とともに一から自分たちで ESD の授業をつくり、そして実際に授業を実践できて非常に貴重な経験が出来た。まさに SDGs の目標 17 に関わったと思う。このプロジェクトで学び、得たことを ESD ティーチャーの学習指導案にも取り入れようと思った。そして、これからの教員生活でも活かしたい。

(英語教育専修 3 回生 稲富麻莉)

◆ 概要

海外の大学生とペアを組み、4 人 1 グループで授業案を作り、天理市立福住小中学校で授業実践を行った。私たちの海外ペアはベルギーとデンマークの方で、Zoom や WhatsApp を使ってやり取りを行った。学習授業案は日本人ペアで異文化理解について作り、実践を行った。

◆ 自分で考えたこと

まず、英語でのコミュニケーションの難しさを感じた。今回は時差があったこともあり、両国の時間がすれ違うことが多く、なかなか Zoom 等で会うことが難しかった。また、私のみ英語を話すことができず、聞き取ることにしても特にベルギーやデンマークの方の癖のある英語が難しかったため、テキスト上でのやり取りにさせていただいた。話すことができなければ伝えられないというもどかしさを痛感し、英語でのコミュニケーション、特に話すことがもっとできるようになりたいと考えた。

次に、授業を作るにあたって、ESD の視点を入れた授業や、中学生に対しての授業をあまり考えたことがなく難しいと思った。また、ペアの方とは専修も学年も違ったため、授業でやりたい内容や、子どもたちへの伝え方の考えも違い、意見のすり合わせや授業の方向性決めに苦戦した。ペアの方とやり取りや仕事の分担もうまくいかなかったり、海外の方から返信がなかなか返ってこなかったりと思い通りに進まないことが多く、他の人と協力して何かを成し遂げることの大変さを改めて実感した。

最後に、実際に授業をしてみて、改めて授業をすることの難しさを感じた。今回中学生に授業をしたり、パワーポイントを使ったりと、教育実習やスクールサポートではできない経験ができた。福住中学校は人数が少なくシャイな生徒が多いと聞いていたが、質問をしたら答えてくれたり、ロールプレイでもたくさん発言してくれたりしたからこそやり遂げることができたと感じた。しかし、パソコン等のトラブルもあり、時間内にすべての活動を終わらせることができず、また中学校の先生からもいくつかご指摘を頂いたため、その点を改善してより良い授業ができるようになりたいと考えた。

(社会科教育専修 3 回生 長滝谷幸子)

ASPnet Teaching Together GC4SD

国語教育専修3回生 杉本朋美

◆ 概要

GC4SDに参加させていただいた。このGC4SDはユネスコが主導していて、様々な国の教育に携わる学生や職員の方と交流しながらESDの指導案を作成し、相互に検討しながらよい実践を目指すものである。

私はフィリピンの職員の方とマッチングをした。フィリピンの方はともに多忙でなかなか会議を行うことはできなかったが、できるときには私たちの学習指導案や考えについてたくさんのアドバイスや考えるべき点を指摘してくださった。英語と日本語での会話なのでなかなか意思の疎通が難しかったが、忍耐強く聞いてくださるので単語を紡ぎながらどのような思いを持っているかを話すことができた。

そして私たちは添上高校で実践を行うことになった。最初提案させていただいた学習指導案は残念ながら却下となり、不安であったが、次に考えた学習指導案は実践の許可をいただけて大変嬉しかったが、コロナによる情勢の悪化により残念ながら高校生の前で授業をする機会は無くなってしまった。

最後に今週末振り返りのミーティングがある予定である。日本の方の学習指導案はもちろん他国の方の学習指導案がどのようなものがあつたのかとても気になるので楽しみである。

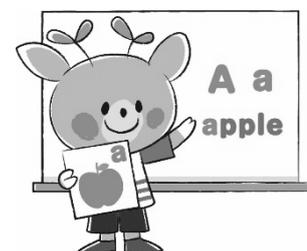
◆ 自分で考えたこと

今回はジェンダーについての学習指導案を書いた。ジェンダーは本当に多くの問題がありとても難しい問題である。私たちは部外の人が1時だけ授業するという立場であるので、学校としてのカリキュラムマネジメントに反しないよう、このいただいた授業を無駄にしてはいけないと考えて学習指導案を考えていた。

正直、教育実習では今回のように授業をさせてもらえないということは無かったので、悲しくなったが、これが現場で求められる授業レベルで、教育実習は大目に見てもらっていたのであろうと痛感したと同時に悔しかったが、今回この経験をできたことは自分にとって良い経験であると思うのでこれからも勉強していきたいと考えた。

◆ 自分で発展させたいこと

私自身の学習指導案の作成について発展させていきたいと思う。今回ペアで活動させていただいた林さんは院生さんであり、指導の根拠を論文に求められていた。今までの大学の授業ではなかなか論文を用いて学習指導案を作成することがなかったので、このように自分の専門以外の単元や分野に関しては情報を集めて、学習指導案を作成していくのだと学び、これから学習指導案を作成する際に行っていきたいと考える。



SDGs が息づく街カナダバンクーバー オンラインツアー

◆ 概要

- ・フェアモント・ウォーター・フロント・ホテルの養蜂場からの中継
- ・バンクーバーダウンタウン東地区にあるサスペンディット・コーヒーのお店の紹介
- ・アクアバスからの中継
- ・サステナブルシーフードのお店の紹介
- ・インディジネス・ネイチャーウォーク

◆ 自分で考えたこと

バンクーバーでは都市全体を通して持続可能な社会を無理なく実現していると感じた。特に、アクアバスでの、自転車を乗せて水上を移動したり、町全体を通して自転車に乗っている人が多かっただけという映像が印象に残った。もし、バンクーバーが車無しには移動できないような街のしくみであれば、これほど自転車は普及しなかっただろうと考えると、まちづくりも持続可能な生活を実践しやすいように行うことで人々は無理なく行動化できているのではないかと感じた。また、文化や自然なども都市との共生を意識して考えられていると感じ、同じような取り組みを日本で行うことは難しいかもしれないが、このような事例を多くの人に知ってもらうことで、自分たちの町の特性を大切にしつつ持続可能な社会づくりの参考にできるのではないかと考えた。

(社会科教育専修 3 回生 長滝谷幸子)

私にとってバンクーバーは、小学校 1 年生のときに見たオリンピックの開催地として印象深い都市であった。初めて興味を持った外国の都市だったが、詳しく調べたことはなかったので非常に有意義で興味深いツアーになった。

まず、バンクーバーは環境に配慮した都市づくりを政府主体で行っていることに驚いた。環境対策を主導する政府は少ない印象があるが、それを都市が行っていることは非常に興味深い。通勤に自転車を用いる人が増えている背景には自転車専用レーンや専用信号機の設置等のインフラ整備がある。また、環境への配慮という意識は民間にも広く行きわたっている。たとえばウォーターフロントホテルでは屋上で蜂を飼っており、蜂とのコミュニケーションを通じて自然界と自分たちのつながりを認識できる。また、バンクーバー水族館発のオーシャンワイズシーフードのプロジェクトの例もある。乱獲という海の最大問題を解決するため、輸出入の情報を集めて消費者にわかりやすく提供している。このような取り組みは、もっと世界中に知られてこそさらに価値あるものへと変遷するだろう。

次に、社会復帰の支援や先住民文化の継承も充実している。たとえばホームレスや精神疾患を患う人が多い地域にあるチョコレート&カフェでは、彼らの自立支援を行っている。すべて手作業である特徴を生かし、たくさんの方がやりがいを持って楽しく働ける。コミュニティを考えて立ち上がったビジネスである。さらに、先住民文化の継承は、親世代がその文化を知らないから自分も知らないといった負の連鎖を断ち切るものであり、先住民が大切にしてきた自然とのかかわりにもつながる。

アメリカのトランプ前大統領が掲げた自国第一主義に代表されるように、近年他者を軽視して身の回りの利益ばかりを追い求める人や団体が増えているように感じる。そんな状況でも常に他者や未来を考慮するバンクーバーの姿勢は、私たちが本来あるべき姿のように思えた。もちろんバンクーバー以外にもこのような都市は存在するだろう。だからこそ、先にも述べたように、このような思想や実際の取り組みをもっと知れ渡らせる必要があるのではないかと考えた。

(社会科教育専修 1 回生 松岡優輝)

SDGs が息づく街カナダバンクーバー オンラインツアー

◆ 概要

- ・養蜂場からの中継 ダウンタウンの中に存在する自然 ウォーターフロントホテル
- ・チョコレート・コーヒーのお店 様々な事情で働けなかった女性の就業支援・貧しい人への無料での商品の提供（一部）
- ・水上を走るボート（アクアバス）・飛行機 排出ガスの削減に配慮している
- ・魚の漁獲について 乱獲をしない、子持ちのエビなどはもう一度放流するなど、養殖
- ・先住民によるガイド・ツアー 音楽、などの文化の継承
- ・森の恵みを受けた暮らし カヌー（舟）を作ったり、生活の必需品を得たりする。

◆ 自分で考えたこと

まず、ダウンタウンに蜂が来る事での弊害はないのかと思いました。確かに都市の中に自然を感じる事は良いことであるとは思いますが、居住空間にまで入り込まれると嫌だと感じました。やはり生物との共生は苦手であっても受け入れなければならないものなのではないのでしょうか。

また、チョコレートとコーヒーのお店の特集を見て、正直、店の従業員に対する偏見などが存在しないのかが心配になりました。就業支援に取り組みに対する評価はされると思うのですが、単にお店としてだけ見ると微妙な立ち位置になるのではないと思いました。客層がとてよく、取り組みに注目している理解のある人々のみが来店するのでしょうか。それにしても、このような模範的な事業があるという事実がとても賞賛されるべきことであると思います。（英語教育専修2回生 前田桃香）

◆ 概要

オンラインで現地の方との中継をつなぎ、バンクーバーの都市観光をした。

◆ 自分で考えたこと

バンクーバーでは環境についての取り組みがたくさんなされていた。考えたことは都市全体で取り組んでいるということについてだ。日本でもやる方がいい。「環境に配慮をして、」と聞くがそれで実行して道路を変更したりしていることは少ない。

考えていることと行動がしっかりと重なっている重要性を目の当たりにした。

◆ 自分で発展させたいこと

私が発展させたいことはESDを今学んでいて、どのように自分の生活に影響しているか、私はどのように生活を変化させたのかを今一度見つけなおす必要があると思う。そうしてSDGsへの理解を深め、自分が何をできるか。社会は何をすることを求めているのか。複雑に絡まり合っている各目標をできる限り取り組み、それを自分の家庭内で終わらせるのではなく発信して周りを巻き込んでいく必要があるとも思う。考えているだけではなく、行動を起こしていく人になっていこうと思う。

（国語教育専修3回生 杉本朋美）

東大寺に泊まろう～世界遺産を体感～

◆ 概要

10月29日から10月31日に東大寺二月堂で、小学生対象の宿泊体験を行った。私は10月30日の活動に参加させてもらった。

本活動では、東大寺の大仏殿や大仏ミュージアム周辺を探索したり読経や写仏、探検で子どもが見つけた東大寺の良いところ・感じたことを31日に発表する際に必要なパワーポイントを作ったりするなどした。

◆ 自分で考えたこと

今回この活動の目的の一つに、「なぜ？を大切にしたい探求活動を通し、主体的・対話的で深い学びにつながる達成感を味わう」というものがあり探求活動後のパワーポイント作りの際、子どもたちが見つけたものに対してどうしてそれが良いと思ったのか、どうしてそう考えたのか、その部分を見てどう感じたかなど、子どもたちの「なぜ」を引き出せるように質問の仕方を考えることが出来た。

さらに、奈良の大学に通っている私でも東大寺について知らないことが多く、子どもたちと探索している時にも自分自身の周りを深めることが出来た。

子どもたちから見た視点と私達から見た視点はかなり違いがあり、パワーポイントを作る際に、例えば鹿について毛並みの固さや鹿せんべいは美味しいのかなど私達が気にしないようなところまで考えているため多様な考え方や視点を子どもたちから学べたと感じた。

今回の学びをこれからの授業づくりや人との関わりの中で生かしていきたい。

(音楽教育専修2回生 森恵里奈)

◆ 概要

東大寺に宿泊し、小学生の子どもたちと東大寺探索や写仏体験を行った。その中で、世界遺産について勉強したりお寺の掃除、食事のお手伝いを通して日本の歴史や文化を体験したりした。私を含めて大学生は、子どもたちのリーダーとして活動のサポートを行った。

◆ 自分で考えたこと

初めて子どもたちのリーダーとなり引っ張っていくという活動をした。東大寺に宿泊したり本堂でお経を読んだり写仏をしたりするという活動は、私にとって大変貴重な体験だったが、それだけではなく、教師を目指す者として一回り成長できた3日間だった。アイスブレイクやリーダーなど、自分が引っ張っていく経験はこれまでほとんどなかったので、緊張や戸惑いがとても多かったが、上回生さんの行動をよく見て、負けじと食らいつくことができた。かなり度胸がついたと思う。前に立つということはとても緊張したが、できるようにならないといけないことなので、これからもこのような活動に積極的に参加していこうと思った。

(書道教育専修1回生 栗垣実咲)

東大寺に泊まろう～世界遺産を体感～

英語教育専修 2 回生 川口彩菜

◆ 概要

これは 2021 年 10 月 29 日から 31 日の三日間、東大寺二月堂に宿泊する小学生の補助をする企画で、私は 10 月 29 日と 30 日に参加した。初日はナイトウォークとアイスブレイキング、読教などを、二日目は東大寺境内の散策、散策で見つけた「東大寺の良いところ」のプレゼンテーション作成の手伝いなどを行った。

◆ 自分で考えたこと

私にとって、初対面の子どもたちとこんなにも密接に関わったのは今回が初めての経験だった。私は活動班のリーダーでしたが、最初に合流したメンバーは小学 4 年生と小学 6 年生の女の子だった。家族と別れた南大門から宿泊する二月堂へのナイトウォークでは、静かに歩き、自然の音を聞くよう指示された。あたりは真っ暗だったため、私は荷物を持つのを手伝いつつ、子どもたちがけがをしないよう注意をしていた。小学 4 年生の女の子は興奮冷めやらぬ様子で「あ！あそこに鹿がいるよ！」などと話しかけてきたが、小学 6 年生の女の子が優しく諭したり、さりげなく誘導したりと気を遣ってくれ、最終的には無事静かに二月堂へと向かうことができた。その小学 6 年生の女の子は元々面倒見が良く優しい子だったが、自分より小さい子どもと関わることで、より責任感が芽生えたのではないかと思う。その後、新たに 3 人の子どもたちが班に加わった。1 日目は子どもたちが就寝準備をするまで残って自宅へ帰り、2 日目は朝から二月堂へ向かったためかなり疲れていた。しかし、子どもたちは私の姿を見ると私の名前を呼んでそばに駆け寄ってくれ、とても嬉しかった。東大寺境内の散策では、班員全員が意欲的に学びを深めていた。私の班は大人 1 人、学生 2 人、子ども 5 人だったので、子どもたちはかなり自由に行動することができた。鹿の年齢によって体毛の質が違うことに気づいたり、熱心に話を聞いてメモをとったりする子どもたちの姿を見て、私は大変驚いた。指示をしたり上から知識を与えたりしなくても、子どもたちは「勝手に学んでいく」のだと知った。フィールドワークの最初、班のリーダー担当の男の子は「早く行こう」と言ったり、一人で先に歩いていたりしていた。しかし、私が少し声かけをしたところ、班のメンバーを待ってくれるようになり、歩きながら定期的に後ろを振り返るようになった。まだ知り合っていない仲間意識が、リーダーとしての自覚を芽生えさせたのではないかと感じた。

また、班のメンバー以外の子どもたちともたくさん関わることができた。ある男の子は小学生なのに英検 2 級を持っており、英語でプレゼンテーションを作成していた。私は英語科なので、改善案を伝えたり二人で議論したりしながらパワーポイントを作成することができ、お互いに良い刺激になった。

◆ 自分で発展させたいこと

今回子どもたちがぐんぐん成長する様子を間近で見ることができ、大変良い経験となった。また、それぞれの子どもたちにはそれぞれの良さがあり、集団生活ではそれが特に顕著に発揮されると感じた。今後は、より効果的な集団生活にするための工夫について考えを深めていきたいです。

今回一人だけ、ホームシックになってしまった子どもがいた。大人と学生二人がよりそってくれたおかげで他の子どもたちの面倒を見ることができたが、他にもできることがあったのではないかと後悔している。今後はそのような子どもへの対応についても考えていきたいと強く思う。

2021年ユネスコクラブ新入生歓迎キャンプ

◆ 概要

2020年度に開催予定だったユネスコクラブでの新入生歓迎キャンプが新型コロナウイルス感染拡大により延期されたため、2021年度の新入生歓迎キャンプと合体させ、1回生、2回生に向けた新入生歓迎キャンプとして7月4日、7月18日の二日に分けて開催された。1日目は奈良教育大学校内でアイスブレーキング、運動会、ワークショップが行われ、2日目は生駒山麓公園で実際にキャンプファイヤーを行った。

◆ 自分で考えたこと

新型コロナウイルスの影響で宿泊や食事など様々な面で制限かかかったため、例年行われているようなユネスコクラブの新入生歓迎キャンプが行えず、様々な工夫をしたうえで開催した。1年以上かけて企画などが練られたため、途中で上回生の方の卒業があったり、対面、非対面両方の企画を考えたりとイレギュラーなことも多々あったが、まずは無事に開催され成功して終わったことが非常に良かった。

今回は、アイスブレーキングのゲーム、キャンプファイヤーのゲームをメインで行ったが、今まで人前に立って何かをすることがなかったため多くの学びにつながった。

◆ 自分で発展させたいこと

アイスブレイクやキャンプファイヤーのゲームなど、人前に出て進行することに初めて挑戦した。ゲームの進行は、声の出し方や時間配分の臨機応変さなどが難しく、うまくできなかったと感じた。また、ゲームの進行自体の工夫ももっと必要だったと感じ、前に立つことやゲームの円滑な進行についてもっと学ぶ必要があると感じた。

(社会科教育専修3回生 長滝谷幸子)

◆ 概要

毎年新入生向けのユネスコクラブへの入部希望者又は新入部員をキャンプでもてなし、ユネスコクラブとは何かということを経験してもらおうという企画である。本企画は昨年度実施予定であったが、新型コロナウイルスの流行により、行えなかった。そのため、今回は現2回生と新入生の両方に体験してもらおうべく行われた。

◆ 自分で考えたこと

私は二日目の生駒山麓公園でのキャンプファイヤーに参加した。私自身、キャンプファイヤーには初めて参加するという点と、久しぶりの対面での活動ということもあり、どのようにして相手を楽しめるものにしていくか、そしてコロナ禍でどう活動していくか考えるきっかけとなった。

あまり経験がない3回生も多い中、自分たちが今できることを出しきって行ったため、成功できたと思う。

◆ 自分で発展させたいこと

普段のゲームをどのように変化させていくのかという点について考えた。コロナ禍における注意すべき事として例えば、接触しないことが挙げられると思うが、キャンプファイヤーで行うものには接触するものも少なくはない。このようなものをどう変化させていくのか考えることで新しいユネスコクラブの活動の在り方を考えるきっかけとなったと思う。

(社会科教育専修3回生 加藤真由)

アースデイ奈良 2021におけるボランティア

社会科教育専修3回生 根本優

◆ 概要

アースデイ奈良 2021 とは、地球と人を想い、持続可能な社会を実現するためには何が大事かを考え、一人一人が地球環境を守る意思を示そうとするイベントである。15 回目となる今年は「自由自在-わたしサイズのくらし-」をテーマに掲げ、60 のブースで体験や販売などが行われたり、春日山の自然と歴史を学ぶ「春日山自然学校プロジェクト 2021」が実施されたりするなど様々な企画が行われた。私は様々なブースがあるなかの一つであるリユース食器の貸出と返却の受付に携わった。

◆ 自分で考えたこと

今回、ボランティアとして参加して学んだこと、感じたことは三つある。一つ目はリユース食器について、二つ目はリユース食器やマイ食器を使用することの良さについて、三つ目はマイ食器を広めるための工夫についてである。

まず一つ目のリユース食器について述べていく。私は今回のイベントに参加するまではリユース食器について詳しく知らなかった。このようなイベントで食品を販売するとなると、割り箸や紙皿などの使い捨て容器がゴミとして大量に排出されるが、リユース食器を使うことによってゴミの量を大幅に減らすことができるだけでなく、イベントに来場した人たちに向けてゴミを減らすことに対する関心を高める効果もあるということを知った。

次に二つ目のリユース食器やマイ食器を使用することのよさについて述べていく。リユース食器やマイ食器を使うことでゴミを減らし、資源を節約できることは言うまでもないが、それ以外にもマイ食器は自分に合ったサイズの食器を持参し、リユース食器についても必要な分だけ食器を借りるため食品ロスを減らすことにもつながるのではないかと考えた。

最後に三つ目のマイ食器を広めるための工夫について述べていく。リユース食器の貸出と返却の受付ブースでは、来場者が持参したマイ食器を撮影し、SNS に投稿する「マイ食器写真館」という企画も行われていた。実際に来場者のマイ食器を見せてもらうとそれぞれ個性があり、興味深かった。このように持参したマイ食器を SNS で紹介することによって、「素敵なマイ食器を持っているね。」とお互いを認め合えたり、多くの人にマイ食器の存在を意識してもらったりできると思った。

◆ 自分で発展させたいこと

リユース食器を使用しているイベントが増加していることを知ったので、自分の地元でもリユース食器が使われているのかを調べ、子どもに授業をするときにリユース食器を教材化するとなったらどのようにすればよいのか考えていきたい。



附属幼稚園の東大寺遠足引率

音楽教育専修 2 回生 藤本尋巳

◆ 概要

2021 年 11 月 9 日、奈良教育大学附属幼稚園の東大寺への遠足に引率として参加させていただいた。まずは大学の講堂で西山先生のお話を聴講し、その後附属幼稚園の先生方と園児と一緒に東大寺に行った。

◆ 自分で考えたこと

一つ目は、東大寺の仕組みや大仏様についての知識だ。大仏様の背中には秘密の扉があり、中がジャングルジムのようになっていて真っ暗であることを初めて知ったが、実際に中に入られたときの経験談を交えて話されており、分かりやすく面白い説明だった。東大寺の中に入ると、ついつい大仏様に目が向きがちで、周りにどのような仏様がいるのか知らなかったが、周りには四体の仏像があり、大仏様は五人暮らしだということを知り、何度か東大寺に行っているにも関わらず、今まで気づくことができなかったことに驚いた。また、大仏様の願いは全ての動植物みんなが幸せになることで、大仏様の右手の形は「大丈夫ですよ」と皆に安心感を与えているということを学んだ。このように、大学生になっても知らなかったことを学ぶことができ、とても光栄だった。また、私は奈良県内の小学校教員を目指しており、子どもたちを将来東大寺に連れて引率することも将来あるだろう。そのときに、西山先生のように親しみやすく理解を促す紹介すると、子どもたちは興味をもってくれるのだろうなと思った。

二つ目は、幼稚園の先生方から学んだ引率時の動きについてだ。横断歩道を渡るタイミングのみでも、先生方はたくさんの動きを取られていた。信号が青に変わる前にできるだけ列を詰めて速やかに渡れるよう声掛けをしたり、渡っている途中には横断歩道の横に立って安全に渡れるように見守ったりする。そして、渡り終わった後にも辺りを見て最終確認をする。また、歩いている途中にも、定位置で歩き続けるだけでなく、列の前後を行き来して整列したり、子どもの様子を見守ったりする。到着後も、人数確認、お手洗いに行っておかないと先がないことを伝えることに加え、今は新型コロナウイルスの感染対策もきちんと行わないといけないため、消毒液を全員のところへ供給するといったように、先生方は動き続けられていたことがとても印象深く残っている。常に視野を広くし、先生間で連携を図りながらチームとなって子どもたちと保護者の方を誘導しながら見守っている先生方の仕事ぶりにとても心を動かされた。

◆ 自分で発展させたいこと

今回参加させていただいたことで、東大寺への知識が深まっただけでなく、先生の立場になったときにどのような動きをしなればいけないのかという勉強をすることができた。やはり、視野を広げて参加者全員に目を配り、安全に行動できるように声掛けをしたり、様子を確認したりしなければならない。とても貴重な経験をさせていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。学んだことをしっかりと心に留め、今後の活動に活かしていきたい。

東大寺 YouTube 収録について

国語教育専修 3 回生 杉本朋美

今回の講話を聞き改めて東大寺と奈良の歴史、大仏に込められた願いを学ぶことができた。

大仏造立の詔の訳文では、「七四三年一〇月十五日、菩薩の願いにより、盧舎那仏の金銅像一体をおつくりする。天下の富、天下の権勢を所持するものは私である。この富と権勢をもって、この大仏を作るのである。大仏造立は容易であるが、造立の趣旨はなかなか理解されない。』『続日本紀』（新詳日本史史料の基礎 180 選 7 ページ 浜島書店 2017 年 2 月 4 日）とある。

今回の講話で聴いたような内容とは内容がかけ離れているように思う。この文章だけを読めば聖武天皇は自身の権力や富を自身だけのものだという傲慢な性格に受け取ることができる。しかし私は講話を聞いて聖武天皇の「責めは我ひとり」という言葉から為政者としての覚悟を感じた。この文章もその覚悟から出てくる言葉だがこの説明だけでは伝わっていないだろう。

上記の例のように、今回の講話で聴いた話は現代の社会で必要な考えであり、推し進めていくべきであると思う。しかし歴史の授業や資料集などにはそのような内容が記載されていない。聖武天皇の願いや大仏を人々が必要とする想いを少しでも教科書などに掲載していくことで児童・生徒たちに考え方の一例を示し、自身の考えを成熟させていくきっかけになるのではないかと考えた。

奈良市子ども会議

家庭科教育専修 4 回生 福井彩乃

◆ 概要

「奈良市の子どもたちに紹介したいコロナ禍の過ごし方を考える」をテーマに話し合う会議の第 2 回に参加した。中高生のグループを担当し、その話し合いに入った。

アイスブレイクをした後、自分がしているコロナ禍の過ごし方をあげた上で、それを、体を動かすこと・音楽に関すること・友達との関わりについてなどに分類した。最後に奈良市の子供たちにお勧めしたい過ごし方について少し考え次の時間に繋げた。

◆ 自分で考えたこと

中高生のグループだったため多くの過ごし方が出てきた。また、司会進行役を自分たちで担当して過ごし方を分類することができていた。オンライン会議だったため口々に話すことが難しく、全員の考えを聞いて相談することが少なかったがグループメンバー一人ずつの意見を聞いてまとめられていた。

音楽を聴いてリラックスするという意見が出た時に、奈良市出身のバンドの音楽を聴いている生徒がいてそこから奈良市に注目して話を広げられそうだった。奈良市の子ども達に紹介したい、というテーマにぴったりだと思った。コロナ禍の過ごし方というテーマで広く話してしまったので何か一つに注目して話し合うことができたならよかったと感じた。

SDGs シンポジウム『奈良から始める！ 新しい観光』

◆ 概要

奈良の大仏・鹿に代わる新しい観光について、新型コロナウイルスによる影響で旅行者が約8～9割減少しているということ、奈良公園について、さらに奈良公園以外の学校の校外学習・就学旅行についてなどのお話があった。

◆ 自分で考えたこと

奈良は京都と同じく歴史学習で中学では特に選ばれるが、日帰りが多いというお話を聞き、実際私自身も校外学習で奈良の東大寺など訪れたが、東大寺のお寺やその周辺の奈良公園などで終わった記憶があり、実際奈良についてお寺と鹿について二つのみしか学んだ記憶がなかった。

そのため、奈良公園が春日大社の先にも広がっていることや奈良町については大学に入ってから学んだため、今回のシンポジウムでも昔から奈良には鹿と鹿せんべいがあったことや春日山に新しい主役になりそうなものがあるなど奈良の新しい一面を多く学べた。

SDGs 学び旅にも出ていた、ならまちコースや春日山原始林、奈良公園のコースなどは、奈良は鹿とお寺だけというイメージを覆すとてもおもしろいものだと感じ、地域特有のものを大切にしていくと同時にそればかりに固執しないことが大切であると学んだ。これは奈良だけでなく他の県や地域でも活用できるものであるため、教師になり自分で地域についての授業を作る際にも取り入れていきたい。
(音楽教育専修2回生 森 恵里奈)

私も小学生の頃の修学旅行の行き先は京都・奈良だったのですが、京都の印象が強かったです。分散学習を行ったり、全員で京都の名所を回ったりしたと思います。しかし、奈良では東大寺と法隆寺を1日で回ったくらいです。さらに学年全員で回り、鹿と触れ合うことができたのは東大寺南大門～東大寺大仏殿までの間でした。つまり、奈良の観光は見て回る範囲が狭く、児童生徒が学びに来て物足りないイメージです。したがって、今回のように、東大寺や奈良公園だけでなく、奈良町の探索はとても良いと思いました。

そして、今回の総会を聞いたうえでの私の案は、春日大社の宣伝、平城旧跡を紹介するパンフレットの制作です。私は奈良教育大学に来て春日大社の存在を知ったのですが、空気もおいしいし、時間的にも最適な場所だと思います。また、東大寺大仏殿の方から登れば二月堂などをめぐり、伝統の行事などで使われる物を見ることができるので、古都奈良をより感じると思います。平城旧跡に関しては、昔の都はこれだけ広がったのかと大きさを実感できると思うからです。小学生であれば、710年に平城京ができたということは学習済みであると思うので、学んだことがすぐに活かされ、脳に定着しやすいと考えます。

以上のことから、今回のESD総会を聞いて、奈良の魅力をより引き出すための方法をESDの視点から考えることができました。よい学びになりました。
(保健体育専修3回生 田中涼子)

万葉文化館授業づくりセミナー

国語教育専修 2 回生 川田大登

万葉文化館授業づくりセミナーが、奈良県立万葉文化館で5回にわたって行われた。これには、万葉文化館の研究員の先生方、中澤先生、大西先生、米田先生などの奈良教育大学の先生方、現職の小学校、中学校の先生方、奈良教育大学の学生が参加した。

1回目、2回目では万葉集やその成立の背景にある歴史的知識を学習した。また、3回目から5回目では、万葉集をテーマとした授業実践について学習指導案を検討したり、実践結果の報告がなされたりした。

私は、4回目以外のセミナーに出席した。以下にそれぞれの回で考えたことを述べる。

◆ 第1回

様々なものを見学をした中で、生徒の興味を惹きそうなものを二つ見つけた。

一つ目は、万葉仮名に関するものである。「二二」で「し」、「八十一」を「くく」と読ませる今でいうダジャレのような使われ方がされていたことを知り、生徒に考えさせることで、昔の人と今の人とで価値観が共有する点について考えさせることができるのではないかと考えた。

二つ目は、古代の発音についてである。例えば、は行を唇を付けて発音していたので「ふぁ、ふい、ふ、ふえ、ふお」という発音になっていたことを再確認した。古代、中古の発音でその時代に書かれた教材を音読させることにより、その時代から現代への長い時間の流れを感じながら、楽しんで古典に親しむことができるのではないかと考えた。

◆ 第2回

明日香の遺跡は、奈良市に残っているものと比べて歴史が古く、わかりにくい。そのため、私はあまり興味が無かったが、説明を聞きながらフィールドワークをすると、そこで何が行われていたかや、何のための遺跡なのかがよくわかり、当時を想像することができた。歩くと実際に地形がわかり、建築物の配置の理由がわかりやすかったので、歴史の学習でも現地で実際に歩くことも重要だと考えた。

◆ 第3回

蔵前先生の事例は、総合的な学習の時間での学習指導案だった。万葉集にも『竹取物語』のフレーズが出ていることを知らず、驚いた。郷土の文学教材に着目して、郷土を知り、その魅力を親や地域の人に伝えるという学習活動は効果的だと考えた。私の地元にもそういうものがないか調査したい。

村上先生の事例は1日を通して万葉集の文化に触れるという学習指導案だった。小学2年生でもその文化に触れることができるよう、様々な工夫がされており、大変勉強になった。

また、お二人に共通する点として、国語にとどまらず教科横断的に、万葉集に触れさせる授業を考えられている点が挙げられると考えた。

◆ 第5回

お二人の授業とも発達段階や学校がある地域に合わせた実践で素直に「すごい」と思った。『万葉集』を単に国語科のC領域や知識・技能の伝統的な言語文化の領域で扱うのではなく、教科横断的に扱う工夫に驚かされた。

このように、良い実践をみることで新たな発見をしたり自分の授業づくりに生かせる視点を持てるようになったりする。よって、来年度もセミナーに参加し、学びつつ、学習指導案の作成に向けて勉強したい。

第1回 春日山原始林の夕暮れ～夜

美術教育専修2回生 高垣有貴

◆ 概要

- ・春日山原始林の夕暮れから夜にかけての時間を体験した。
- ・遊歩道に寝転び、暗闇の中で森の音や空気を感じるとともに夜の生き物たちの息遣いを感じた。
- ・コース：飛火野～上禰宜の道～春日山遊歩道～遊歩道入り口（解散）

◆ 自分で考えたこと

暗闇の中で遊歩道に寝転び、森の音や空気感、においなどを体全体で感じる事ができた。とても心地よくて、寝てしまいそうになった。暑い日中に聞くセミの声と、涼しくなってきた夕方に聞くセミの声とでは、雰囲気は全く違った。タコガエルという山にいるカエルは、いつも見るカエルよりも、ジャンプ力がとてもすごくてびっくりした。

自分たちは日頃あまり気づいていないだけで、壁や木の上などをよく見たり、森の音をよく聞いたりしてみると、本当にあらゆる生き物が住んでいることがわかった。こういった多様性のある美しい自然を守っていくためにも、自分たちには何ができるのか、今日からすぐにできることは何かを考えていくことが大切だと感じた。

春日山原始林に入る前に、外来種の「ナンキンハゼ」を見つけ、もうじき切られてしまうことを知った。鹿も食わず、増えてしまったことが原因だという。しかし、そこだけ切ったからといって解決するわけではなく、人間の都合で植えたものを、人間の都合で切るというのはどうなんだろうかと考えさせられた。まずは、「外来種はどのようにして日本に持ち込まれたのか」、「この先、増え続けたら何が問題なのか」などを学んでいくことから始めなければならないと考えた。

第3回奈良公園・春日山原始林フィールドワーク(東大寺・二月堂)

文化遺産教育専修2回生 大竹玲央

◆ 概要

夕暮れ時の東大寺・二月堂周辺を歩く。昼間とは違う二月堂からの景色や東大寺の雰囲気を味わう。

◆ 自分で考えたこと

東大寺には何度も訪れており、夜の奈良公園・東大寺にも訪れたことがあった。今回は多人数で訪れることができた。何回も訪れて思うことは奈良時代や平安時代、鎌倉時代、様々な時代の文化財が残っていることがすごいと思う。今回は二月堂中心だったが、三月堂や正倉院、転害門のような建造物、大仏や不空羅索観音のような仏像も知ってもらいたいと思った。特に三月堂の仏像群は奈良時代のもので、現代の人たちだけではなく、未来の人々にも見せたいと思う。正倉院は建築だけでも貴重な文化財だが、正倉院に収められている正倉院宝物も世界に誇れる文化財だと思う。

◆ 自分で発展させたいこと

東大寺には貴重な文化財があるので、この文化財の魅力を子供達に教えて、文化財を未来に受け継ぐようにしたいと思った。歴史の側面だけではなく、自然科学の側面から見られるようにしたいと思った。歴史が好きな生徒だけではなく、理科が好きな生徒も巻き込んで、東大寺の文化財の魅力を伝えたいと思った。

第4回春日山・高円山フィールドワーク

社会科教育専修3回生 加藤真由

◆ 概要

- ・春日山原始林にてフィールドワークを行った。
- ・高円山に行き、原生林でどのような植物が生息しているのか観察を行った。

◆ 自分で考えたこと

高円山には、鹿が食べない植物が大きくなり、鹿が食べる植物はなくなるという現状がはっきりと目に見て取れた。

また、ルリセンチコガネなど私が見たことも無い虫もいた。このことから、人の手が入っていないくても様々な要因で生態系が変化すると考えた。

◆ 自分で発展させたいこと

私は、今回のフィールドワークから生態系の変化に直接人間が関わっていないくても、鹿が植物を食べてそのシカを保護しているのと同じようにどこかしらで関与していると理解した。これからは私自身が起こしている行動がどのように環境に影響を与えているのか知ろうと思う。

第7回春日山原始林フィールドワーク

社会科教育専修3回生 長滝谷幸子

◆ 概要

春日大社国宝殿前から春日大社、春日山原始林内を通り、若草山山頂へ向かった後下山するというコースで、フィールドワークをした。フィールドワークには環境活動家のカトリン・フックさんもご参加されていた。

◆ 自分で考えたこと

春日山原始林にはシカやムササビ、イノシシなど多様な動物がいることを知った。また植物に関しても、ネイチャーゲームで葉っぱじゃんけんを行ったように、たくさんの種類があることがわかった。また、春日山原始林内にあった月日岩や石仏、春日山原始林の碑などが現代に残っていることから、昔の人々も春日山原始林を大切にしていたことを伺うことができた。さらに、春日山原始林を未来へつなぐ会の取り組みとして、シカが芽を食べないようにするための柵や、ナラ枯れを起こさないようにするための対策の話などを聞いた。

これらから、春日山原始林は多様な自然や歴史があり、昔から今まで人々が大切にしてきたことを伺うことができた。春日山原始林は東大寺や春日大社などの多くの人を訪れる場所の近くにあるにもかかわらず、なかなか関心を持つ人が少ない印象なので、春日山原始林で今起きている問題を広く知ってもらふことや、これからも春日山原始林を大切にする人が増えるようにすることが必要だと感じた。



第2回森と水の資源館授業づくりセミナー

◆ 概要

優良実践事例である大牟田市立吉野小学校の島先生が実践された授業の報告を聴き、その事例の分析を行いました。

◆ 自分で考えたこと

今回初めてESD演習に参加しましたが、学校の先生や源流館の方、川上村の方など様々な立場の方のお話を聞くことが出来たととても良い機会になりました。

島先生の実践報告を聴いて、まず教材導入の方法が上手だなと感じました。ヒノヒカリのお米を使ったおにぎりから川の水にたどり着くというのは児童自身誰も予想していなかったはずですが、興味関心もちやすいし、身近なものに触れているので学ぶことを通してより親近感がわくのではないかと感じました。

事例分析を通じて「川」はある日急にできるものではなく、さらに上流・中流・下流があるので、自分の住む地域に焦点を当てながら川の空間的つながりや時間的つながりを知ってもらい、未来のためにいまの私たちに何が出来るのか考える機会を作ることも大切だと感じました。都市部にも山間部にもそれぞれの良さがあり、特に都市部に住むものはあまり山間部のことを考える機会がないのが現状です。お互いがそれぞれの役割を果たすことで今の私たちの生活があるということを子どもたちも知ってもらいたいです。このことは、川についての学習だけでなく様々な教材でも言えることだと思います。教科として断面的に学習しがちですがそれが何と関わっているのか、時代が進むにつれてどのようなになったのかを知ることでつながりを意識した授業づくりが重要だと感じました。また、生物指標調査で川の水質について考えてみるという意見に納得しました。川のきれいさが私たちの生活だけでなくほかの生き物にも影響するという視覚的に捉えることが出来るので、子どもたちも理解しやすいのではないかと感じました。
(社会科教育専修1回生 山平楓)

川を環境を題材にしたESDの授業ということで生徒達に川の大切さを伝えることができると思った。下流域に住んでいる子供達に綺麗な水はどこからやってくるかと問うことで、自分たちが住んでいる地域だけではなく、遠く離れた上流域の人々の生活・考えを知ることができる。そして上流域のことを知ることで下流域に住んでいる自分たちと上流域に住んでいる人たちは決して無縁ではないということを実感させられると思った。自分たちから遠く離れた場所の人たちの生活は関係ないと思っても、川で繋がっているということを示せば、他にも一見関係ないような人達・ものと自分たちは繋がっていることを考えさせられると思う。

川上村で行っている取り組みがなくなればどうなるか生徒達で考えれば面白いと思った。自分たちにどのようなデメリットが生じるのか、そのデメリットをどうすれば解決することができるのか。このようなことを考えることを通して、川上村で行っていることの凄さに気づくことができるかもしれないと思った。川で遊べなくなるということは水の冷たさ、水流などを感じる機会が減ってしまうと思った。綺麗な川では泳いだり、飛び込んだり、魚などの生物に触れるということが出来るが汚い川では、このようなことが困難だと改めて考えることができた。川で遊ぶことで水流の強さや深い所の危険性を学ぶことができると思うが、川遊びの機会がないとこのようなことを学ぶことも困難になる。自然を感じるだけではなく、自分の身を守る術を得ることができなくなってしまう。

(文化遺産教育専修2回生 大竹玲央)

第4回 森と水の源流館授業づくりセミナー

文化遺産教育専修2回生 大竹玲央

◆ 概要

今回の授業づくりセミナーでは3人の先生方の授業構想案から意見交流を行った。現職の教員の方だけではなく、森と水の源流館の方達とも交流を行うことができた。

◆ 自分で考えたこと

屋久島の学校だけではなく、北の方との繋がってみたいという話になった時、福島県のアクアマリンふくしまのことを思い出した。アクアマリンふくしまは環境のことを重視した水族館で、展示の中に山と海のつながりを実感させる展示があった。その展示は福島の上流の水生生物から始まり、中流域の生物、そして海の生物にたどり着くという展示だった。このような展示を授業に組み込むことで、生物の知識だけではなく、川と海はつながっているということが実感できると思った。

アクアマリンふくしま HP <https://www.aquamarine.or.jp/exhibitions/>

◆ 自分で発展させたいこと

今回の授業構想案の中で、川崎先生の道徳の授業案で相手を理解することでいい関係を構築する、という考えをより発展させたいと思った。ユネスコ憲章にも、戦争を起こさせないためにも人の心の中に平和の砦を築かなければならない、とあるように互いの文化を理解し合うことで戦争の火種を無くそうとしている。文化を相互理解する方法は様々だと思う。コロナ禍では困難だが、実際に現地に訪れることやその場所の本に触れること、写真を見ること、電話などで話を聞くことなどの方法があると思う。他にも世界遺産や文化遺産を用いる方法もあると思う。特に世界遺産はその文化圏の特徴や根幹を表しているなので、文化を理解するにはいい手段になると思った。

日本と世界がつながっているということを示す文化遺産は様々なものがある。特に法隆寺や正倉院宝物は国際的な文化遺産だと思う。法隆寺は飛鳥時代に建立された寺院だが、建築物の柱は胴張りという手法が用いられ、ギリシャのパルテノン神殿とのつながりを感じることができる。また法隆寺金堂壁画の描写は中国の敦煌や、インドのアジャンター石窟壁画に類似しているという特徴もあり、世界的なつながりを感じさせることができる。正倉院宝物は日本では見ることができないような動物が描かれている宝物が多くある。螺鈿紫檀五絃琵琶ではラクダ、螺鈿紫檀阮咸にはオウムが描かれているなど、国際的につながっていなければ制作することができないような宝物が存在している。描かれているものだけではなく、宝物の材料から見ても世界的なつながりや文化の相違点・共通点を知ることができると思う。

しかし、このような文化遺産を用いた授業を行うとすると、生徒たちの興味・関心を惹くことが難しいと思う。また内容的に難しいものも含まれているので、興味を引き続けられるかが重要になると思う。



第1回学びが喜び・ESD 連続公開講座

◆ 概要

- ・ VUCA 時代
- ・ ESD を推進することが SDGs の達成に貢献
- ・ 人間的魅力、生徒に対する深い愛情、学び続ける姿勢が生徒の心に火をつける
- ・ 大牟田市の取り組みについて

◆ 自分で考えたこと

VUCA 時代になっているのは、技術の進歩が大きいと考えられる。ESD を推進する教師で子どもの意思決定や主体的な学びを大切にする教育の姿勢をもつことはアクティブラーニングに関係があるのではないかなと考えられる。

◆ 自分で発展させたいこと

子どもたちに教える立場となったときに「アクティブラーニング」をうまく取り入れられるか。受検のことも考えるとどうしても受動的な授業になりそうだから。

(特別支援教育1回生 山中杏純)

◆ 概要

「教育委員会が求める先生とは」という題材で元大牟田市教育長 安田昌則先生がお話ししてくださいました。先生が勤務していらっしやった福岡県大牟田市の ESD・SDGs への取り組みについてから始まり、市のすべての学校がユネスコスクールに認定されているからこそできた取り組みや、新学習指導要領にも考え方が組み込まれている ESD の理念や取り組みについても詳しくお話ししてくださいました。

◆ 自分で考えたこと

今回私は初めて ESD の取り組みについて直接お話を聞くことができたのですが、大牟田市の ESD への取り組みの推進具合にとっても驚きました。奈良教育大学では多くの SDGs・ESD の取り組みが実施されていると思うのですが、自分の出身学校では全くと言っていいほど ESD や SDGs という単語を聞いたことがなかったので、将来教師として現場にでて取り組もうとしたときに何をどうすればよいかという指標が自分では立てにくいという風感じていました。しかし、今回お話を聞く中で自分の中で少しですがどのような取り組み方を実際はしていくのかに対して想像ができたので大牟田市や奈良県内の取り組みなど具体例を知れてよかったです。

今の時代求められる教師についての部分では若い人材が即戦力でないといけない、ということで新指導要領にある ESD の考えをどのように実践すべきかを在学中に考えておかないといけないなという風にも感じました。アクティブラーニングで行う授業はそこに付随する学年単位の授業や自分一人ではできないことなので ESD について学んだことをどのように赴任先に活かしていくのが大切で、児童に正しく・身近に SDGs の考えを理解してもらい実践していってもらうためにも自分自身さらに知識や経験を増やして、より多くの人のスタンダードな考えになるよう尽力できる教師を目指したいと思います。

(音楽教育専修1回生 渡邊詩菜)

第1回学びが喜び・ESD 連続公開講座

英語教育専修2回生 前田桃香

◆概要

- ・大牟田市はカルタ発祥の地であり、みなと小学校のある地である。
- ・持続可能なまちづくりとユネスコスクールの理念が一致した。そのため、市内の小中学校、支援学校が全て加盟した。まちづくりは、人づくりから。
- ・教員の世代は20.30代が中心。ミドルリーダーとなる教員を育てていく事が必要。
- ・今の子ども達は、今存在しない職業に就く。society5.0の社会で生きていく。ラーニングコンパスは、自分達が幸福を求める為に行う事。OECD. 変革を起こす力のあるコンピテンシー？新学習指導要領に、ESDが盛り込まれている。持続可能な社会の作り手になる為、資質や能力や態度を明確に示している。主体的で協同的な学びは、既に学習指導要領に盛り込まれているものであって、さらに加えられるものではない。教育基本法では教員のすべき事、ベルリン宣言では重要な？役割について明示されている。
- ・大牟田市の子供は、自分ごと化して何か行動を起こす事を目標に教育を受けている。教育活動の充実を通じて、SDGsの達成を図っている。
- ・ESDの第二次の計画では、教員の人材の確保に関しても触れている。ユネスコスクールの取り組みで、現職の教師も教師の卵も良い高上を得ている。良い教師は人間性、内面に働きかける事ができる。(大牟田の教材開発をしっかりと行った先生の例、特産品のPRを大阪の物産展で行う。特産品。高齢者とペアになって一緒に回り、まちの問題を見つける。)
- ・ユネスコの活動で育った子供が教師となって帰ってくる、繋いでいく。内面的にencourageする、教員が一番必要ではないか。
- ・ESDを推進する教師に求める力には5点(関係付け考える力・発想力・主体的に学び行動する子供の育成(教師自らの)、教育の果たす役割を自覚、協働する力、ネットワーク力)あり、主に三つ専門性・人間性・協同性、そして教師としての熱い思い。色々と答申や文科省のESD推進の手引き
- ・実践の例
吉野小学校での桜の苗植え絆プロジェクトの人との連携、大正小学校でのフラワータウンプロジェクト(花を植える、苗のプレゼント)、中友小学校での、子供民生委員活動(高齢者の方の家に訪問しに行く)十日市プロジェクト、馬史小学校での、文化遺産を紹介するボランティアガイド、多摩川小学校での、米作りと伝統芸能(米はかり踊り)の継承、海を通した海洋教育
自分達で自分なりに考えたまちづくりについて、議会や市職員に発信する。

◆自分で考えたこと

- ・様々な教育や教員養成に関する最近の実態を知ることが出来て、大変有意義な内容であった。
- ・傑出してESDによく取り組まれている大牟田市の存在を初めて知ることが出来ました。市全体を上げて、ユネスコスクールに加盟し、全ての人でSDGsの実現に向かう姿勢が素晴らしいと思いました。現実的な問題点は色々とはありますが、この市以外にも、同じように地域全体を上げて取り組む前自治体が増加すればよいと切に思いました。ただし、対象が小中学校と特別支援学校のみとなっていたので、それ以外の校種がどのようになっているのかが気になりました。
- ・ユネスコスクールの加盟が現在は停止していると聞いたのですが、今はどうなっているのかが気になりました。

第1回学びが喜び・ESD 連続公開講座

◆ 概要

- ・教育委員会が求める先生とは？
- ・講師 安田昌則先生(前 大牟田市教育長)

◆ 自分で考えたこと

初めて大牟田市を知りました。そして ESD の実践が数多く行われていることも初めて知りました。世界遺産や数多くの歴史的なものがたくさんある奈良だからこそできる教育だと思いました。小学生のうちから近くの世界遺産を訪問したり子どもたちがガイドしたり地域の方と交流するという活動は私はあまりしてこなかったし、そのような場所もあまりないので、とても素晴らしい教育だと思いました。と同時に、そのような世界遺産や歴史的なものがない地域ではどのように ESD 教育を進めていけばよいのか気になりました。(書道教育専修 1 回生 栗垣実咲)

◆ 自分で考えたこと

今回、私は初めて大牟田という地域があって、そこでは ESD 教育が盛んにおこなわれている事を知りました。小学生のうちから地域のお年寄りの方々を訪問して交流を深めたり、世界遺産について調べてガイドをしたりと色々な活動をしているのが印象的でした。自分の地元ではこのような活動はあまりなかったので、実際にどのように取り組んでいるのかが気になりました。

ESD は最近ようやく学習指導要領記載されたばかりで、全国的に経験も知識も不足している中、大牟田での取り組みは貴重な資料になり、大牟田で実際に ESD に取り組んだ人はこれからの教育を引っ張っていく人々になるのではないか、と思いました。

◆ 自分で発展させたいこと

大牟田での実践例をもっと詳しく調べて、ESD を実践する際の、活動準備から振り返りまでの具体的な流れを学び、自分の地元で ESD を行うには具体的にどのようにしたらいいかなどを考えたいと思います。また、大学在学中に ESD や SDGs に関する活動を一から立ち上げてやってみたいと思いました。

(特別支援教育専修 1 回生 實久峰希央)

◆ 概要

ご講演では、大牟田市におけるユネスコスクールの取り組み・発展や国の教育政策の方向性、これから求められる教員像など、マクロの視点とミクロの視点を織り交ぜたお話があった。

◆ 自分で考えたこと

ESD を推進する教員のための五つのポイントとして、「世の中の動きに敏感で、現代社会の課題を理解していてその課題の解決に教育が果たす役割を強く感じていること、子どもの意思決定や主体的な学びを大切にすることを、一生懸命に頑張ること、個別最適な学びと協働的な学びを一体的にすること、多様な人材を確保すること、多様なスタッフ等とのチームと連携すること」が挙げられていたが、新学習指導要領に基づく教育を実践する力・多様な人と関わる力そして熱意や努力が必要だと思った。そのために大学の授業で学ぶ基礎的な教員としての力量をしっかりと身につけた上で、サークル活動などでは様々な人と関わっていくことが重要だ。これらは普通にやっただけでは十分に身につかないことなので、熱意と強い意志をもって実行していきたい。

(国語教育専修 2 回生 川田大登)

第2回 学が喜び・ESD 連続公開講座

保健体育専修3回生 田中涼子

◆ 概要

① 小学校教員の仕事

● 授業

・授業準備 ・教材研究 ・授業 ・丸つけ ・生徒指導 ・家庭連絡

● 校務分掌

② 小学校教員の1日の流れ

③ 教員生活での学び、やってよかったこと

- ・学んだことを試してみる
- ・本や周りの先生から積極的に学ぶ

→子どものことを考えて行動すること、分からなければ先輩に聞く

- ・学び続け、必要な力・人間性を高めること

例) コミュニケーション力

◆ 自分で考えたこと

大学では学ぶことのできない小学校教員の仕事や魅力を学べたので、とても身になりました。私は保健体育専修の中等教育履修分野なのですが、小学校の先生になりたいので小学校の授業も取っています。そのため専門の保健体育以外の教科を深く学ぶことができず、不安しかたないからです。しかし今回のお話を聞いて、先輩方も教師になってからもたくさん勉強をしているんだな、小学校教員の魅力は思っていた以上にたくさんあるんだなと思うことができました。改めて小学校教員になりたいという思いが強くなりました。

そして、私は1か月前ほどに附属中学校に行って教育実習を行ったのですが、中学校では専門分野だからこその授業の工夫や部活動指導、生徒指導を行っており、小学校にはないものだと感じました。来年、小学校に実習に行く予定ですが、飛鳥小学校に教育実習に伺う予定です。さらに教材研究の授業準備について質問させていただいたのですが、学年に応じて準備の仕方や時間が変わることが分かりました。それも含め、たくさん経験したいと思いました。



第3回 学が喜び・ESD 連続公開講座

音楽教育専修 1 回生 渡邊詩菜

◆ 概要

○食生活からエシカル消費を考える

奈良教育大学附属中学校 中嶋たや先生

- ・エシカル消費とは？→より良い社会に向けた人や地球環境、社会、地域に配慮した消費活動

例)フェアトレード オーガニック 地産地消

- ・家庭科の授業では自分を見つめ直すことで、“プロシューマー”という企業が求める消費者を育成
- ・エシカル消費の授業は多くはファッションを題材にしたものであった。しかし、ファッションは個人差が多い分野であるのが難点。そこで日常とより結びつきやすい食生活の分野からフェアトレードを題材に授業を行なった。

・エシカル消費について自ら調べさせることで自分の生活も大事だということに気がつく。自分で買い物をしたりすることで調べるのも重要。

・企業に質問をすることで返答が得られる場合があった。大々的に〇〇取り組んでいます！などとしているところほどいざ質問してみると丁寧に返事が得られなかったりすることが分かった。

例)コープ 永谷園

・小学生と中学生、大学生では考えが同じ題材でも違うことがわかる。Google jam ボードを利用して意見の交換を行なった。

・家庭科は実習も大事だが、考えることが大切である。自分らしい生活をするために学んだことをすぐに日常に生かせる。

◆ 自分で考えたこと

エシカル消費を全て肯定していこうというスタンスで授業を展開するのではなく、現実味を持たせて生徒が実践しやすいように配慮してあるところにとっても惹かれました。

環境に配慮しようと授業で習ったとして、それを実際にその生徒が日常生活に戻って実践するためにはあまりにもかけ離れたものでは意味がないように感じます。ESD もそうですが、日常に近づけた題材から取り組み徐々に興味とともに考えを広げていくことができれば良いのではないかと思います。



第4回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座での学び

英語教育専修4回生 下原舞

2021年11月26日(金)、奈良教育大学で開催された第4回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座『タイムリミットまであと7年 いま、わたしたちにできること』にオンラインで出席し、名古屋を拠点として環境問題に関する啓発活動を行っているフंक・カトリンさんにご講話いただいた。本レポートでは、この講座で学んだこと・考えたことを以下の2点から振り返りたい。1点目に出来ることから行動することの大切さ、そして2点目に知ること・理解することの重要性についてである。

1点目の出来ることから行動することの大切さについてである。カトリンさん自身は、畜産が環境に悪影響を及ぼすことを知りヴィーガンになったとお話されていたが、私たちにヴィーガンになることを強要することはなかった。代わりに「いきなりヴィーガンになるというのはハードルが高い。まずは肉の中でも特に二酸化炭素排出量の高い牛肉の消費を抑えるところからでも良い。牛肉の代わりに豚肉を使う、この小さな行動の変化でも意味がある」という伝え方をされた。の講話を拝聴し、私が考えたのは、出来ることからコツコツ行動していくことが大切だということである。タイムリミットが迫っている中、今を生きる私たち地球市民一人ひとりが危機感と責任感を感じなければならないのは事実である。しかし、無理に自分の生活を変えようとしても、突然の大きな変化に自分自身の体や心がついていけなくなってしまう、自分の生活の質が損なわれてしまっは本末転倒である。無理なく長く続けられるような小さな行動の変革が、一人ひとりの中で増えていけたら一番良いのではないか。私が実践したいと思ったことは、牛肉やプラスチック製品の消費を抑えることと、商品の裏のラベルに目を通すことである。こういった小さな行動の変革を、まずは個人レベルの日常の中で意識していきたい。

2点目の知ること・理解することの大切さについてである。カトリンさんのご講話の中で、気候変動の現状と背景、気候変動を助長する仕組み、気候変動による環境への影響、具体的な対策を取る目的、世界が合意した目標などについて簡潔に分かりやすく教えていただいた。今の生活を続けるためには地球何個分が必要かという問いに対してスライドで分かりやすく説明があり、タイトルの「7年」が何を意味するのかについてもお話いただき、プラスチックが人間に与える悪影響や森林伐採の進行度、温室効果ガス排出量の変化等、具体的なデータを示しながらご説明いただいた。私が実感したのは、現状・影響・背景・仕組み・目標を知って、理解すればするほど危機感と責任感が増すということである。当たり前のことのように聞こえるかもしれないが、まずは知ることから全てが始まる。理解が深ければ深いほど、何をすれば良いかが明確となり行動に移しやすい。知識・理解が浅ければ、漠然と「何か行動をするべきとは分かっているが、何をすればいいか分からない」状況に陥りやすい。そのため、私たち学校教員がESDの授業を実践するときも、しっかりとデータを提示したり質の高い調べ学習に取り組ませたりして、「知る・理解する」というファーストステップの質を高められるようにすることが重要であると再認識することが出来た。

奈良教育大学が取り組んでいるGC4SDプロジェクトにおいて、私の班は気候変動を主題とした授業実践を行う予定で、現在計画段階である。今回のお話は、自分自身の地球環境に対する危機感と責任感を高めるきっかけとなったと同時に、子どもたちの意識を変革するためにどのように伝え導けばいいかなどのヒントを多く得ることもできて、非常に有意義な時間となった。カトリンさんから受け取ったメッセージを子どもたちに還元できるよう、これから実際に授業計画を練っていききたい。そして、自分自身の生活も見直して、出来ることからコツコツと、無理なく長く続けていける小さな行動の変革を意識していきたい。そのために、「程よい」危機感と責任感を持つことが重要であると考えた。

第5回学が喜び・ESD 連続公開講座

英語教育専修2回生 川口綾菜

◆ 概要

2021年12月7日に開催された、第5回学が喜び・ESD 連続公開講座に参加しました。前八名川小学校長の手島利夫氏による『ESDの必要性を学校の教員にとって、一番大事なものをお伝えします』という講義で、大変熱く語っていただきました。

◆ 自分で考えたこと

情報化、グローバル化、気候変動、コロナなど、近年社会は変わり続けていますが、世界が変われば物事の正解も変わります。教育の観点から世界を見てみると、日本の大学の順位が低下し、アジアの他の大学の順位が上昇してきています。この理由は、知識からコンピテンシーへと教育政策を変えたからだそうです。つまり、日本は時代に合わない教育をつづけてきたということです。では、学校教育をどのように変えていく必要があるのでしょうか。私は「対話的にする」「五感に訴える」などが思いつき、参加者からは「主体性・自発性を育む」「実用的な内容にする」「教科横断的に取り組む」「アクティブラーニングをする」「教室からでて学ぶ」「暗記の試験をやめる」などの意見がでました。ここで手島先生がおっしゃったのは、「総合的な学習の時間を大切にする」ということです。効果的な授業にするためには、カリキュラム・マネジメントを行って全体を総括的に考え、様々な視点をもって繋げていくことが重要だと聞き、大変納得しました。たくさんの場を設け、発信する力や学び合う力など、汎用的な能力をどう育むかについて考えていく必要があります。

発信する力や学び合う力について、発表会の事例を紹介していただきました。当たり前のことですが、初めての発表で上手くいくわけがありません。一回切りだとほとんどの児童が失敗してしまいます。「恥かいた」「もうしたくない」と思ってしまい、例え褒めても嘘だと思われるそうです。そこで、何回もやれるように機会を与え、何回目か後に褒めると喜んでくれたそうです。また、上級生のプレゼンを聞くとコツが分かり、協働的に学ぶことができるとおっしゃっていました。

また、問題意識をもっている児童ともっていない児童の違いについて教えてくださいました。消防署へ見学に行った際、問題意識をもっていない児童は「こんなのがあるんだ。」で終わるそうです。一方、事前学習で児童の感情に訴えかけ、自分事化させられるように工夫すると、消防署で「素晴らしい準備や工夫ができています。」と言われても「どんな準備だろう?」「ほんとかな?」と問題意識を抱き、消防署を隅から隅まで見るそうです。私はこの事例を聞き、上から知識を与えるだけではいけない理由がよく分かりました。また、深い学びのためには、児童自身がやりたいことを優先させてあげることも大切なのかも感じました。

◆ 自分で発展させたいこと

私は今回の講義で、効果的なESDの実践には、総合的な学習の時間を上手く利用し、児童に問題意識を持ってもらうこととアウトプットの機会をたくさん設けることの大切さを感じました。もちろん教員によるカリキュラム・マネジメントや内容の質が大切なのは言うまでもありませんが、児童への働きかけが上手くいかないと、良い結果は望めません。今後は問題意識を持ってもらうための工夫や、成長に繋げるための工夫についても、子どもたちに寄り添いながら探究していきたいです。大人主体・伝達型の伝統型から、子ども主体・変容型のESDへと移行させるよう、頑張ります。

第5回学び喜び・ESD 連続公開講座

◆ 概要

- ・ESD・SDGs 推進研究室室長 手島利夫先生
- ・ESD の必要性和具体化
- ・ESD カレンダー
- ・教科横断的なカリキュラム・マネジメント

◆ 自分で考えたこと

大学の講義などで、主体的な学びやカリキュラム・マネジメント、教科横断的などをよく聞いていた。しかし、何となくの理解しかしていなかったもので、本講座を聞いて、深い理解を得ることができた。教員になっても学びを止めず、児童や他の教員、様々な人と交流しながら、自分自身も学び続けることが大切であると考えた。そのことが児童の教科横断的な学びや主体的学びにつながると考える。また、児童自身が学び続ける姿勢を保てるように、教員の適切なサポートや声掛けを行ったり、ESD カレンダーなどを用いた単元の全体像をしっかりと把握したり、児童になってほしい姿を明確に持つておくことが大切であると考えた。児童の学びに火を付けることも大事であるということにも感銘を受けた。様々なものに会うことや気づくこと、問題意識を持つことが大切であり、それに対して答えを与えるのではなく、児童達が学ぼうとしたり、問題を解決しようとしたりする姿勢をサポートすることが教員の役割であるということを実感した。本講座を通して、教員としての役割について考える機会となった。自分の教員像というものがより明確になったような気がする。教員になった際、学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

(音楽教育専修3回生 佐藤こころ)

◆ 自分で考えたこと

子どもの疑問に対して「それはね…」と答えてはいけない、その疑問を学びにつなげていくことが重要だということを知り、「待つ」ということが大切なのだと感じた。ESD、主体的・対話的な学習過程を実践するには時間と労力がかかることで、どうしてもすぐに答えを出そうとしてしまうが、教員として、子ども達の心に火をつけるために教員が突き進んでいけない。教員が先に進んで待っているのではなく、教える側である反面、子ども達と一緒に学びを作っていくように、子ども達のスピードに合わせて、「自分たちで学ぶ」という姿勢を大切にしていきたい。

◆ 自分で発展させたいこと

手島先生のお話を何度か聞いたことがあるが、何度聞いても圧倒されるというのが感想としてある。ESD の学びを深めるだけでなく、人を引き込む話し方ができるようになりたいと強く思った。

(特別支援教育専修2回生西田有佳里)



第1回奈良ESD連続セミナー

◆ 概要

SDGs の理解促進を目的とし、SDGs の 17 の目標、第二次世界大戦から SDGs までの流れを学び、MDGs や企業など複数の視点から SDGs を捉えた。SDGs に親しむために学生や現職の先生方、その他施設等の方々とのグループワークで、SDGs を分類したり文化を「見える文化」「見えない文化」に分類したりした。また、SDGs にないものから SDGs を絶対視するものではなく、改良途中のものとして捉える必要があることを学んだ。

◆ 自分で考えたこと

MDGs から SDGs に引き継いだゴールが SDGs の 17 の目標のうち 3 分の 1 に該当することから、約 15 年の長いスパンで考えられている目標でも達成できるものはごく僅かであるということを感じた。また、MDGs や SDGs を引き継いだゴールとして新たな達成目標が 2031 年以降誕生する可能性も高いということも考えた。それでも、今、大切なのは全世界(国)が SDGs に取り組むことであると考えている。全ての国が取り組むことによって、小さな積み重ねが大きな成果として現れると思う。

日本でも SDGs への取り組みに熱心な企業が増えてきていることは知っていたが、グリーンウォッシュのように本来の意図から外れた誤解を招くような取り組みをアピールする企業があることを初めて知った。私たち学生は偽りに惑わされないように、SDGs の本質を見極める力や SDGs の知識、実践力をこれからの連続セミナーで学んでいきたい。

(特別支援教育専修 3 回生 山中彩加)

◆ 概要

SDGs の理解促進

MDGs から SDGs へ → 環境問題へクローズアップ

SDGs にない文言

「互いの宗教を認め合いましょう。」 「宗教の自由を尊重しましょう。」

「見えない文化に関すること」

「核兵器廃絶に関すること」

◆ 自分で考えたこと

SDGs に明記されていないものを学んだ。それは「宗教」に関することや、「核兵器廃絶」に関することだとわかった。

「SDGs を達成すれば、世界は良くなる。」という、SDGs を絶対視するような考え方ではなく、「SDGs は改良途中のものである。」と捉えていくことが大切だと考えた。そしてそれを将来、子どもたちにも伝えていきたい。

また、伝えるだけでなく、どこをどのように改良すればいいのかを考えて交流してもらい機会を作りたいと考えた。それと同時に自分自身も学びを深め、考えていきたい。

(美術教育専修 2 回生 高垣有貴)

第 2 回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

SDGs と解決しなければならない地球的諸課題との関連付けを行った。地球的諸課題の核心や SDGs の項目で特に興味があるものについて現職教員や学生、NPO・企業・自治体の方々と意見交換を行い、SDGs の理解を深めた。

◆ 自分で考えたこと

SDGs の 17 の目標の中で特に興味のあるものについてグループで意見交換を行った。教育について学んでいるため、最初から教育に関心がある人もいれば、教育に関わる機会が増えたことで教育に関心を持ち始めた人もいた。意見交換を通して、教育は考え方や価値観を形成していく重要な役割を担っていると感じた。また、教育の質が確保されると、技術革新が進むことで経済発展がされ、貧困の解決や戦争・紛争の解決につながったり、他者理解が促進され、宗教の対立が解決されたりといったように、課題が連鎖的に解決できるのではないかと考えた。しかし、水や衛生面の改善などの生活改善が行わなければ質の高い教育を実現することは難しい。このことから、現在抱えている地球的諸課題は単純なものではなく、複雑に絡み合っていることを改めて実感することができた。

(社会科教育専修 3 回生 根本優)

◆ 自分で考えたこと

現職教員、NPO・企業・自治体の方々と意見を交換することで、学生だけでは発想できない側面にも気づくことができ、非常に面白かった。それぞれが専門にしていることやその人のバックグラウンドによって、考え方や価値観が変わってくるのだなと感じた。その価値観が違う人たちと触れ合うことで自分の視野を広げることができるので、奈良 ESD 連続セミナーは非常に貴重な機会だと改めて思った。これからも様々な考えに刺激をもらい、多面的な視野で SDGs への理解を深めていきたい。

(英語教育専修 3 回生 稲富麻莉)

◆ 自分で考えたこと

本日の連続セミナーでは、ブレイクアウトルームで様々な方の意見を聞き、SDGs の考えを深めることができた。一番印象に残った活動について述べる。

一つ目は地球的諸課題である。私はまだ世界中に関する現状の詳しい知識がないので、あまり思いつかなかったのだが、他の 3 人の方の意見を聞いて知ることができた。例えば、人口爆発やジェンダー問題、雇用不安などである。

二つ目は最後に行った、自分の興味のある SDGs を提供したことである。私のグループでは、教育と貧困を 1 番にした人に分かれた。どちらも自分の外せない思いがあり、それぞれの思いに感銘を受けた。

以上のことから、SDGs は奥が深いと改めて思った。

(保健体育教育専修 3 回生 田中涼子)

第3回 ESD 連続セミナー

◆ 概要

SDGs や ESD についてやそれらの行動の変革を促す方法などについて学んだ。グループワークでは、ESD で育てたい価値観を育てるための活動の経験について話し合ったり、ソマティック・マーカーテストについて話し合ったりした。

◆ 自分で考えたこと

ESD の授業などで ESD の視点や価値観、育てたい資質・能力については何度か学んだことがあったため、改めて学習することができた。ESD の価値観を育てる活動としてボランティア活動などが含まれることを初めて知り、自分のボランティア経験が自分の無意識化で自分自身の ESD の価値観に影響を与えていたことに気づいたり、他の方のボランティア等の経験がどのように活かしているかを知ったりすることができたため、これからも色々な活動を行うことを通して、経験や学びを深めることが大切だと感じた。

また、ソマティック・マーカーについては何度も授業などで聞いたことがあるものの、日常生活でなかなか意識できていないことを感じた。改めて生活を見直すとともに、これは知識がなければ気づくことができないので、知識の網の目を細かくすることをこれからもしていかなければならないと考えた。

(社会科教育専修3回生 長滝谷幸子)

◆ 自分で考えたこと

ナッジと ESD の違いについて知らないことが多かったので学ぶことができて良かった。ボランティア活動や自然との交歓、人との交歓の体験を通してどのような変化が得られたかということのを他の受講生から聞くことができた。私もそのような経験があると共感したり、初めて聞く経験談もあつたりして面白かった。また、ソマティック・マーカーや ESD の視点、クリティカルシンキングについても学びを深めることができた。

まず、ソマティック・マーカーについて述べる。ソマティック・マーカーについては何度かお話を聴いていたが、もう一度お話を聴くことでさらなる理解につながり、これからも健康や環境負担、人的負担などに対する意識を持って物事・行動の判断をしていきたいと考えた。

次に、ESD の視点について述べる。ESD の視点「①多様性、②相互性、③有限性、④公平性、⑤連携性、⑥責任性」を育てていくことが今後の社会を切り拓いていく人間には必要なものであると考えている。そのためには聖人のお話を聴かせて自分の生きる指針を見つけたり、神話を通して自分たちはどのように育っていくのかということが無意識のうちに認識させたりして心の栄養をたっぷり児童生徒に与えることが大切なのではないだろうか。

最後に、クリティカルシンキングについて述べる。クリティカルシンキング、探究的な学習など様々な方法があると知ったので、一つ一つひも解いて、自分の授業実践に活かしていけたらいいなと考える。

(教育学専修3回生 岩城雄大)

第4回奈良 ESD 連続セミナー

特別支援教育専修3回生 山中彩加

◆ 概要

1. 福岡県大牟田市立吉野小学校の ESD 実践例

- ①実践の ESD としての価値
- ②地域・社会参画に向けた手立て

2. ESD の視点を取り入れた授業の構成（総合的な学習の時間・英語科）

- ①総合的な学習の時間（英語科）ESD の視点からの評価、アドバイス
- ②英語で行う価値

上記二つの実践例を取り上げ、①②について意見交換を行った。

◆ 自分で考えたこと

1. 福岡県大牟田市立吉野小学校の ESD 実践例

①実践の ESD としての価値

私はこの実践で、社会との交流や活動を通して ESD で育てたい価値観を学ぶことができると思う。よって、この実践による ESD としての価値はあると考える。ただ、どこに重点を置くのか、指導者が導く方向性によって効果は左右されるのではないかと感じた。

②地域・社会参画に向けた手立て

まずは、子どもと地域の人が地域の繋がりを大切にすることが大事である。また、地域への愛着がなければ今回の実践例も成り立ちにくい。子どもも地域の人や地域の良さを再発見し、そこから自分自身が地域に関わる良さを感じ、良さや課題を深掘りして学ぶことが地域の繋がりを大切にすることの第一歩であると考えます。特に子どもからのアイデアは壮大で夢物語な部分もある。子どもから何を発信し、どのように実行するのか。一つでも実行し成功体験を得ることも ESD に繋がると私は思う。

2. ESD の視点を取り入れた授業の構成（総合的な学習の時間・英語科）

①総合的な学習の時間（英語科）ESD の視点からの評価、アドバイス

子どもが(1)見つめる(2)調べる(3)深める(4)広げるという授業展開に見通しを持ちやすく、パフォーマンス課題で発信する場を設けている点が良い点であったと思う。私自身も単元構想や教科横断的に ESD を学ぶことへの意義を改めて考え直すきっかけになった。

②英語で行う価値

今回の授業構成の例はテーマに広がりがあるため、もし英語で行うのであればテーマを絞りさえすれば英語で行うことも可能であると思った。英語から学べること(英語からしか学べないこと)もあるという点が新たな発見だった。パフォーマンス課題で子どもが英語であっても伝えたいことが伝えられるのか、英語が不得意と感じる児童への配慮などにおいて指導者の工夫が必要になるだろう。

第 5 回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

3名の先生方の単元構想案を相互に検討し合う。

◆ 自分で考えたこと

蔵前先生の単元構想案は広陵町の竹取物語と万葉集に係る授業だった。総合の授業で実施されるとおっしゃっていた。広陵町出身の学生と同じ班になったので、どのような状況かということも把握することができ、面白かった。広陵中学に勤められていた先生もおられ、様々な意見が話されて面白かった。歌碑が建てられているということだったので、それをマッピングする授業も面白いのではないかと感じた。

福住小中学校の先生方の単元構想案の検討も行った。虫の話と鹿の話だった。身近にある生き物探しは行って、そこからどのように ESD とつなげていくのかということが焦点だった。生物多様性につなげていくのかどうか。希少性ともつなげることができるかもしれない。日本の固有種がどれほどいるのか、希少価値のあるものなのかどうか、児童の関心や興味によって少し内容を変更してもよいように感じた。鹿の話は奈良市の人々がどのように鹿と共生しているかということについて調べようということが学習目標であったようだ。奈良市の先生は鹿が町に現れて様々な害も及ぼしているということも考慮して学習指導案を作った方が良いという指摘をされていた。奈良市の小学校との連携も面白そうだという意見があった。私も奈良市の小学校と福住小学校が連携するのがよさそうだと感じた。直に意見を聞けるということが最大のメリットだと感じている。

(教育学専修 3 回生 岩城雄大)

◆ 概要

現職の先生方の単元構想案の検討会

どちらも地域を中心として歴史や環境に視点を当てた内容であった。

◆ 自分で考えたこと

蔵前先生の単元構想案について述べる。竹取物語はかぐや姫ということで知っている児童が多いが、万葉集自体が児童にとって距離が遠いものであるため、昔の書物を読むことで児童が「知っている！」などと感じられるようにして課題への距離を縮めていくということが主体性をもって進めるためのポイントなどと理解した。

しかし、万葉集などはどうしても難しいものであるため、単元の導入部分において音やリズムを使うことで興味の関心を引き出すなどが必要だと感じた。

福住小中学校の先生方の単元構想案について述べる。地域を好きになるという点から考えた際に地域の生態系につなげることで地域の良さを実感できることに繋がると理解した。2年生では、まだ難しいかもしれないが、9年間で学習を進めるうちの一つであると考えた際に、他の地域はどうかかなどと疑問をつなげ、他校との交流など様々な視点がどこかのタイミングで挙げられると感じた。

◆ 自分で発展させたいこと

他の地域との交流や県などの全体的な場所を学習した際に、最後に自分の地域でできることを考えることで行動化と変容につながると先生がおっしゃっていたのを聞いて、指導案を書く際に自分の地域ではと考えられる活動を入れようと考えた。

(社会科教育専修 3 回生 加藤真由)

第 6 回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

現職教員の単元構想案の相互検討

○中村先生の単元構想案 第 6 学年 平和学習と SDGs

○本多先生の単元構想案 第 2 学年 生活科 町のすてきをつたえたい

◆ 自分で考えたこと

「争いや戦争がなくなることは本当に平和なのだろうか」という問いは、一歩立ち止まって考えさせられる問いだった。この問いをすることによって平和の本質を考えることができると思った。平和学習と聞くと戦争や核兵器といったことを連想する。しかし子どもたちにとって戦争や核兵器を自分事化するの難しい。子どもが「なぜ?」「なんとかしなくては!」と切実感をもたないと行動にはつながらない。子どもが切実感をもって平和について考えられる学習活動や発問が大切だと考えた。また私自身も平和とは何かについて考えを深める必要があると思った。

町たんけんは自分の地域を実際に自分の目で知る機会である。「すてき」と思うところは子どもたちそれぞれであり、それらを拾ってあげて授業の展開に取り込んでいくのは難しいと思った。しかし、授業の展開に合わせようとして、子どもの素直な気持ちを拾えなかったら、地域への興味・関心が薄れてしまいそうなので、町たんけんでは自分が住んでいる地域を素敵だ、魅力的だと感じさせることを一番の目的にすることが大切だと考えた。

(社会科教育専修 3 回生 根本優)

◆ 概要

今回のセミナーでは、学生がつくってきた単元構想案を現職の先生とともに二つのグループに別れて相互検討をした。一つの単元構想案に対して、学生だけで意見を出し合うのではなく、たくさんの現職の先生方からも指摘があった。学生の単元構想案をより良いものにし、学習指導案作成につなげようと多くの意見交換が行われた。

◆ 自分で考えたこと

実際に教員として働いているからこそ気づける点を何か所も指摘してくださっており、非常に参考になった。ESD の学習指導案づくりや ESD の授業を実施するうえで気をつけなければならない点に気づくことができた。これからも現職の先生方からの貴重な考え方・意見に刺激をもらい、多面的な視点で ESD を考えていこうと思う。私はまだ単元構想案をつくれていなかったもので、次回のセミナーまでに今回相互検討されていた視点を含めて自分の単元構想案を作成しようと思った。

(英語教育専修 3 回生 稲富麻莉)

第7回奈良 ESD 連続セミナー

社会科教育専修 3 回生 岡本真実

◆ 概要

今回のセミナーでは、樋口先生と加藤さん、稲富さんの単元構想案について検討を行った。

まず、樋口先生の単元構想案では秋篠川に対してどういったものが集まってきているのかという問いについて子どもたちとともに考え、より秋篠川の魅力を生かしていくということについて考えるものであった。これに対して、子どもたち自身に川の様子についてデータを集められるように透視度計や水質生物資料調査を秋篠川で活動として行うことが提案された。また、鴨川での整備において関わった行政や人々と秋篠川の整備における共通点を出していくことで、地域の課題を自分事化させることも提案されていた。

次に、加藤さんの単元構想案では警察の仕事について主体的な学びをさせていくものが紹介された。それに対し、導入の部分において子どもたちでも考えやすいように問いを変える必要があることや知識形成をさせていく順番を入れること、警察に対する組織的に考えさせることが必要であるということが提案されていた。

最後に、稲富さんの単元構想案ではプラスチックごみの問題をできるだけ解決させていくためにはということが紹介された。これに対して、プラスチックのものを一体的に悪いものとして扱っている部分があるためその部分での改善が必要であるということでは言われていた。

◆ 自分で考えたこと

今回のセミナーでは社会科の内容についての単元構想案が出されていた。樋口先生の構想案では、生徒と秋篠川でのつながりを強めるために様々な工夫が必要であると言われていた。それにより、子どもたち自身も地域に対してより興味を持つことができると言えるだけでなく、深い学びを促すことができるだろう。しかし、保護者自身が秋篠川に対して興味がなければ、保護者の秋篠川への願いというものを取り入れることができなくなるだろう。そのため、事前に保護者に向けて秋篠川に対する認識についてアンケートをとる必要があるのではないのかと思った。

次に加藤さんと稲富さんの単元構想案では、学習指導要領の内容があまり盛り込まれていないものとなっている印象があった。そのため、どういった力を子どもたちにつけていきたいのかが少し不明瞭であったり、活動の内容が簡素的になったりしてしまっている状態となっているのではないのかという印象を持った。そのため、単元構想案の時点で学習指導要領の内容を確認することが必要になっていくのではないのかと感じた。

◆ 自分で発展させたいこと

単元構想案を出していく際には、まず教材研究をしっかり行うだけでなく、学習指導案での内容を踏まえていく必要があると言えるだろう。また、生徒が自分事として考えられるようにしていくために様々な工夫が必要になっていくと言えるだろう。

第 8 回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

学生の単元構想案の相互検討

○田中さん 小学校第 4 学年 社会科 水

○岡本さん 中学校第 1 学年 総合的な学習の時間 春日大社

◆ 自分で考えたこと

田中さんの単元構想案は「水」をテーマに取り上げたものだった。日本では、蛇口をひねれば当たり前のように水が出てくるので、水は無限にあるように子どもたちは錯覚している。子どもたちが思っているこのあたり前を崩すことが大切であると思った。あたり前を崩したあとに、実際に自分の水の使い方を振り返らせると、「水を大切に使うなくてはいけない。」という意識が強くなり、行動化につながるのではないかと考えた。また、「節水をしなさい」とよく言われるが、そもそもなぜ節水しないといけないのかという根本的なことを問うことで、なんとなく節水するのではなく、根拠をもって節水できるようになると思った。

岡本さんの単元構想案は春日大社について取り上げたものだった。春日大社は、シカや春日山原始林との関係など、多面的・多角的に捉えることができる。様々な角度から捉えられるため、最初から焦点を絞ってそれを深く探究した方がよいのか、生徒の興味・関心に応じて各視点で探究させていくのがよいのかを考えるのは難しいと思った。また、神社や祭りを取り上げる際には宗教の問題に配慮する必要があるという意見が検討の中で出ていた。私はあまり宗教に馴染みがなく、宗教に関する配慮について考えたことがなかったので、今後自身が神社や祭りを使って授業案を考えるときは注意しなければいけないと気づかされた。

(社会科教育専修 3 回生 根本優)

◆ 概要

学生の単元構想案の相互検討が行われた。私のブレイクアウトルームでは杉本さんと山中さん、私の単元構想案の検討が行われた。

◆ 自分で考えたこと

自分の単元構想案に関しては、教材を用いて何を教えるかを明確にする必要があると分かった。地域のよさについてなのか、考え方についてなのか、何を勉強することが目的なのか不明瞭であることが単元構想案の中で最も改善すべきか所だと分かり、自分の思いや単元との関連を踏まえて指導案を書く前に単元計画を修正する必要があると考えた。

また、他の方の単元構想案では、学ばせたい事柄を教員が絞ることや、地域の人の協力を得た授業づくりについて話されており、自分の指導計画の中にも生かせる部分があると感じた。

(社会科教育専修 3 回生 長滝谷幸子)

第9回奈良ESD連続セミナー

◆ 概要

現職教員の方々のESDの授業実践検討会

◆ 自分で考えたこと

大学院生の方以外は実践をされた方々の報告だったので、言葉に実態が伴っていて、児童の姿が見えてくるようで面白かった。できているところ、改善すべきところが表れだして、学校教育が良くなっていくのいいなと感じた。

平群北小の事例で、消費するのは自分たちだということに気づかせ、使えるときには使うという無理のない持続可能な社会づくりのための行動を示していることが面白いと感じた。

私がESDの学習指導案を作る際も、児童生徒が普段している行動を少し変えるだけで持続可能な社会につながるのだということを実感させられるような教材にしていきたい。

(教育学専修3回生 岩城雄大)

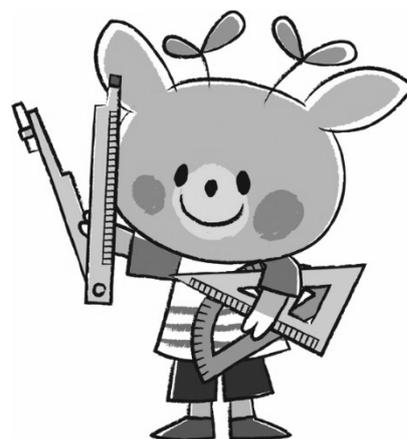
◆ 概要

今回のセミナーでは、現職の先生方が作成した学習指導案を二つのグループに別れて相互検討した。学生が考えた学習指導案とは違い、先生方が実際に学校現場で実践された学習指導案ということで、より高度な相互検討が行われた。現職の先生方による現職の先生方のための高レベルな考察・意見が活発に交換された。

◆ 自分で考えたこと

実際に学校現場で実践されたESDの指導案を知ることができて、刺激をもらい非常に参考になった。また、実践した上で見つかった課題や苦労を私たち学生に教えてくださり、ESDの学習指導案を作成する際に留意する点に気づくことができた。どの先生方も机上だけの学習にならないように、講話を聞かせたり、子どもたちが主体となる活動を取り入れたり、子どもたちへの動機付けやESDを楽しんで学べるような工夫がされていて自分も参考にしたいと思った。今回現職の先生方から学んだことを自分の学習指導案にも反映させて、より良い学習指導案を作成したい。

(英語教育専修3回生 稲富麻莉)



第10回奈良 ESD 連続セミナー

社会科教育専修3回生 根本優

◆ 概要

・学生の学習指導案の相互検討

- 田中さん 小学校第4学年 総合的な学習の時間 「水を長生きさせよう」
- 根本 小学校第4学年 社会科 「安曇野の水～等々力孫一郎の意志～」
- 岡本さん 中学校第4学年 総合的な学習の時間 「春日大社のすごさって何？」
- 佐藤さん 小学校第5学年 総合的な学習の時間 「地域全体で防災意識を高めよう」

◆ 自分で考えたこと

田中さんは、「水を長生きさせよう」というテーマで、節水について考える学習指導案だった。学習に取り組む前と後で自分たちの行動がどのように変化したのかを可視化するために、手洗いの様子を動画に撮影したり、使用した水の量を数値化したりしていたので、子どもたちが意欲的に取り組める工夫がされていると思った。また根拠や自分の考えをもつての行動化を促すためには、知識を深めることが大切である。授業をつくるときには、授業者の願いを明確にし、それを達成するためにどのような知識を深める必要があるのか、どのような教材や学習活動が適切かを考えることが大切だと感じた。

私は、拾ヶ堰を取り上げた等々力孫一郎について取り上げた学習指導案書いた。単元構想案から学習指導案に書き起こすときに、まとめにどのような活動を取り入れるのがよいかかなり悩んだ。そこで単元構想案の相互検討のときに、現職の先生から「おいしいものを食べたときに誰かに伝えたいように、すごいものを見たり、聞いたりしたら誰かに伝えたいのではないか。」という意見をいただいたことを参考にパンフレットの作成と配布を学習活動に取り入れることを思いついた。まず、身近な人に伝えようという考えのもと、おうちの人にパンフレットを配布すると学習指導案に書いたが、今回の相互検討のときに、「おうちの人だけではもったいない。」「駅や図書館に置いてもらうような活動を取り入れてもらってはどうか」という意見をいただいてはっとさせられた。自分たちが一生懸命調べたり学んだりしたことをさらに外に発信することは子どもたちにとってやりがいや達成感を感じられると思った。

岡本さんは春日大社のすごさについて多様な視点から追究する学習指導案だった。導入の春日大社クロスワードはとても興味深かった。春日大社のすごさだけでなく、課題点についても考えさせる学習活動が取り入れられていた。すごさと課題点の両方を追究することによって、愛着がわき、さらにそこから「春日大社を自分が何とかしなければならない。自分ができることは何だろうか。」と自分事として考えることができると思った。

佐藤さんは防災意識を高めるために避難所ゲームを取り入れるなど実践的な内容の学習指導案だった。相互検討のときに、家庭の防災対策が本当に安全なのかを考えるときに家庭によってそろえられるグッズは事情によって異なるから、学んだ知識を使って自分たちで防災対策を考えさせたほうがより主体性が生まれるのではないかという意見が出て納得した。しかし、既存の防災対策に対して本当に安全なのかをクリティカルに考えることで防災意識を高められることもあると思うので、本当に安全な防災対策なのかを考えるときは、家庭ではなく地域に目を向けて考えた方が子どもたちへの配慮になると感じた。

第 10 回奈良 ESD 連続セミナー

特別支援教育専修 3 回生 山中彩加

◆ 概要

- ・学生の学習指導案の検討

私のグループは長滝谷さんと杉本さん、私の学習指導案を検討し、全体では佐藤さんの学習指導案を検討した。

◆ 自分で考えたこと

今回の連続セミナーで学習指導案を形にすることができた。学習指導案を作成した段階では、基本的な知識や決まったルールに着目した指導の展開が中心だったように思う。しかし、今回ご意見をいただいて、子どもの気付きや動機づけのためには人から学び、アスリート等の人からの影響力をうまく使っていきべきだと感じた。障害のある方とコミュニケーションを取ったり、実際にパラスポーツを体験したりすることも学びに繋がるだろう。パラリンピックから人と人との繋がりに着目し、人との関わり、人を通じての学びを仕掛けていくことを大切にしたいと思った。それが、（障害の有無に関係なく）公正とは何なのか、無意識の偏見に気付くことに繋がると考える。

第 11 回奈良 ESD 連続セミナー

書道教育専修 1 回生 栗垣実咲

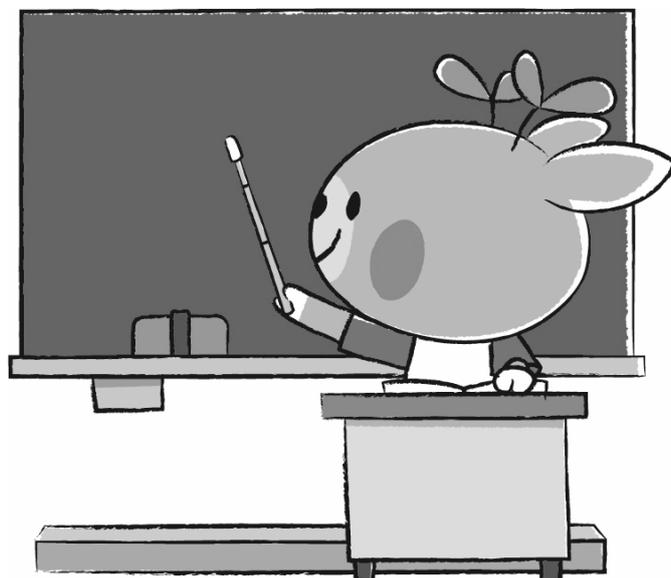
◆ 概要

- ・学習指導案の検討
- ・循環型クラスを実現させよう～モロッコとの交流を通して～

◆ 自分で考えたこと

学習指導案をつくったことはなかったのですが不明点や改善点などは正直よくわからなかったが、ESD の学習をここまで多面的に行えるということを知り、とても勉強になった。モロッコとの交流など、良いチャンスをたくさん取り込まれてとても面白い授業になっているなと思った。生物基礎の授業内で取り組みことは限度があると思ったが、総合の時間などの枠で取り組めばもっと色々な要素が取り入れられそうだと考えた。

色々な科目を融合させて大々的にできたらいいなという話から、私が高校生の時、総合の時間で高 2・3 年生が一緒になって、社会・環境・経済・数学的な分野など、好きな分野にわかれてそれぞれに専科の先生がつき、SDGs の学習・研究をし、英語でプレゼンするという活動を思い出した。このような学習形態も面白いなと思った。



終わりに

奈良教育大学 教育連携講座 准教授 中澤 静男

E S Dティーチャーを取得するためには、3年かかります。該当するE S Dの単位を取得するだけでなく、講演会や研究会、シンポジウムなどの授業以外のE S Dの学びに参加する「E S D演習」を2回以上、学校現場でのE S D活動を支援する「E S D実践」を2回以上行い、ポートフォリオを作成しなければなりません。さらに現職の教員の指導の下、奈良E S D連続セミナーや授業づくりセミナーに参加し、SDG sやE S Dへの理解を深め、E S D単元構想案を作成発表し、最終的にE S D学習指導案を作成し、提出する必要があります。長くハードな道のりかもしれませんが、2016年度から始まったE S Dティーチャープログラムで、すでに31名の先輩が卒業までにE S Dティーチャーの認定証を手にしておられます（今年度、新たに9名の先輩がE S Dティーチャーに認定されました！）。E S Dには教科書がありませんので、教材開発から児童生徒の学び方に即した単元デザイン、社会教育機関との連携の仕方などを一体的に学ぶことができるとともに、全国におられるE S Dティーチャーとも知り合いになることもできます。この報告書を一読された学生の皆さんが、E S Dティーチャープログラムに参加してくださることを期待しています。

このE S Dティーチャープログラムの一環として参加された「E S D演習や」「E S D実践」の報告書が掲載されているポートフォリオには全部で158件の報告がありましたが、3名の学生編集委員の方々と一緒に掲載文を選出していきました。

学生編集委員

音楽教育専修	3回生	佐藤	こころ	さん
社会科教育専修	3回生	根本	優	さん
国語教育専修	2回生	川田	大登	さん

他にも掲載したいポートフォリオがあったのですが、断腸の思いで選出していただきました。（掲載されなかったみなさん、すいません。）

コロナの感染拡大に対応する形で、大学教員の方は授業やイベントをオンラインやハイブリッドに変更するぐらいのことしかできませんでしたが、学生のみなさんの方は、これまで子ども達を募集して実施していた「集まれ！E S D広場」の実践を、コロナ陰性であることが確実な学生が学校に出向いてクラス単位で実施するなど、コロナ禍にも関わらず工夫して取り組んでいました。こういうあきらめの悪さが大切だと思います。

コロナの感染拡大に加えてロシアによるウクライナ侵攻、景気回復に伴うCO₂排出量の増大など、世界はますます持続不可能な状況に向かっているようにも思えます。近畿E S Dコンソーシアムのキーワードは「不東」です。将来社会のすべての人々が、幸せに生きることができる社会が実現できるまで、不東の精神で取り組んでいきましょう。

2021年度

奈良教育大学ESD学生活動実施報告書

2022年3月31日

近畿ESDコンソーシアム・奈良教育大学

印刷：共同プリント株式会社